サムエル書下

本書はサウルの死からダヴィドの治世の終までの事件を記錄した、約四十六年間にわたる歴史である。

第一章

ダヴィド、サウル及びヨナタスの死を悼み、サウルを殺したりと云いし若者の死刑を命ず。

一 さてサウルの死したる後、ダヴィド、アマレク人討伐より歸りて、二日の間シケレグに留まりしことあり、二 然るに三日目に至り、1) 衣服を裂き頭に塵を被りて2) サウルの陣營より來りし人現れたり。しかしてその人ダヴィドの許に至るや平伏して敬禮せり。3) 三 時にダヴィド彼に云いけるは、「汝何處より來りしぞ。」彼云いけるは、「我はイスラエルの陣營より逃げ來れり。」四 ダヴィドまた彼に云いけるは、「何事か起

第一章 1) シケレグの町がベルサベーの附近にあつたとすれば、軍隊などには殆ど不可能でも、敏捷な健脚の傳令使ならゲルボエ山とその町との間の距離は二三日で走破できた。 2) 深い哀悼の印。 3) 原語adoravit.

りたる。我に告げよ。」彼云いけるは、「民戰爭より逃げ去り、民の中
殪れ死したる者多し。剩えサウル及びその子ヨナタス殺されたり。」
五 と。ダヴィド己に告げし若者に云いけるは、「汝は如何にしてサウル
六 とその子ヨナタスとの死したるを知るや。」と。彼に告げし若者云い
けるは、「我偶々ゲルボエ山に至りしに、サウルその槍に倚り、戰車
七 及び騎兵之に迫れり。[4] 時に彼その背後を顧み、我を見て呼びたれば
八 我は〃ここにあり〃と答えたり。彼我に〃汝は誰ぞ。〃と云いしか
九 ば、我彼に、〃我はアマレク人なり。〃と云えり。然るに彼の我に
一〇 曰く、〃わが傍に立ちて我を殺せ、そは苦痛我を襲い、しかもわが生
命全くしてなお我の中にあればなり。〃と。一〇 よりて我、彼の傍に立
一一 ちて之を殺しぬ。蓋は我彼の仆れて後、生存え得ざることを知りたれ
ばなり。しかして我その頭にありし冠と、その腕にありし腕環とを取
りて、[5] わが主君なる汝の許に持ち來れり。」と。 一二 その時ダヴィド

4) 母上三一・三―六にある聖書記者の記述と比べて見ればすぐわかる通り、大部分嘘の話。

5) このアマレク人は戰鬪の後こういう物を盜むことばかりしていたのであろう。腕環はその大きさ美麗さにより階級を示す印であつた。それでこれらの物は王の身分を示す位階章の一つであつた。

一二　己が衣服を摑みて之を裂き、6) 彼と共にある人々も皆然なしたり。一三かくて彼等泣き悲しみ、サウルの爲、その子ヨナタスの爲、また主の民の爲、イスラエルの家の爲に、日暮まで斷食せり。そは彼等刄に仆れたればなり。一三ダヴィド己に告げし若者に云いけるは、「汝は何處の者なりや。」7) 彼答えけるは、「我は

一四　他國の者即ちアマレク人なり。」一四ダヴィド彼に云いけるは、「汝何故に汝の手にかけて、主の注油し給いし者を殺すことを

一五　恐れざりしぞ。」と。8) 一五ダヴィド次いでその僕の一人を呼びて云いけるは、「近づきて彼を討て。」と。彼乃ちその者を討ちた

一六　れば死せり。一六ダヴィドまたその者に云いけるは、「汝の血は汝の頭にかかれかし。9) 蓋は汝の口〃我、主の注油し給いし者を殺せり。〃」と云いて、汝の非を告げたればなり。」と。10) 一七さてダヴィド、サウル及びその子ヨナタスを悼むに、かくの如き

6) 舊約聖書に屢々出てくる深い哀悼の表示。
7) ダヴィドは相手がユデアの國境外の者で、正當の戰鬪でサウルを殺したのか、それとも王を敬うべきイスラエル國内の定住者と思われるか、それを知ろうとしたのである
8) 詩一〇五・一五。
9) マテオ二六・二八參照
10) 報告者はダヴィドを王と認めたので、ダヴィドから褒美を貰うつもりでしたにしろ、主の注油し給うた者を殺したことに對する罰を正當と認めざるを得なかつた。

一八　悲嘆の歌を以てし、一八（命じてユダの裔等に弓[11]を教えしめたり、是は義人の書[12]にある如し。）しかして云いけるは、「イスラエルよ、汝の高き處にて傷つき死せる人々を偲べ。一九イスラエルよ、汝の名ある者は汝の山の上にて殺

一九　偲べ。

二〇　されたり。勇士は如何にして仆れしや。二〇ゲトにて告ぐるなかれ、またアスカロンの街衢にて告ぐるなかれ、[13]是フイリスト人の娘等の喜ばざらん爲、割禮なき者の娘等の雀躍せざらん爲なり。二一ゲルボエの山々よ、汝等の上には、露も雨も降ることなかれ。また初穂の畑もあることなかれ。そは其處にこそ勇士の楯、サウルの楯、恰も油を注がれざりし者の如く、棄てられたればなり。二二ヨナタスの矢は殪れし者の血を啜らず、勇士の脂肪に飽かずして戻りしことなし、サウルの劍は空しく歸りしことなし。二三サウル

11) この歌を「弓の歌」（本當は「弓」）というのは、多分二二節にヨナタスを射手に見立てているからであろう。この歌は形式からすれば五節に、内容からすれば、サウル及びヨナタスを悼む悲しみ（一九―二四節）、ヨナタスへの哀悼（二五―二六節）悲歎の總括的結び（二七節）の三部に、分けられる。12) 義人の書は、書一〇・一三に出ている。少數の人の説によれば、それは讃美歌集であると。13) ゲト及びアスカロンはフイリスト人の五主要都市中の二つ。これらには訃報を傳えないでほしいそれを知ると欣喜雀躍するばかりであるから。

二四 とヨナタスとは、その生前愛すべき麗しの者にして死後も亦相離れず。彼等は鷲よりも疾く、獅子よりも強かりき。二四イスラエルの娘等よ、サウルの爲に泣け、彼は喜びて汝等に紅の衣を着せ、汝等の

二五 裝身具に黄金の飾を與えたり。14) 二五勇士等は如何にして戰鬪に殪れしや。ヨナタスは如何にして汝の高き處にて殺されしや。二六わが兄弟ヨナタスよ、我は汝の爲に悲しむ。汝は甚だ美しくして、女に優りて愛すべき者なりき。15) 母がその獨子を愛する如く、我も汝を愛

二七 しめり。二七勇士等は如何にして仆れしや、戰爭の器は如何にして失せたりや。」と。

第二章

ダヴィド迎えられてヘブロンにて注油を受けユダの王となる—サウルの子イスボセト、その他のイスラエル領を治む—アブネルとヨアブとの戰。

一 その後ダヴィド主に問いて、1) 「我ユダの市々の一つに上るべきか。」と申しけるに、

14) サウルはその出征の時いつも色美しい衣服や高價な金銀細工品を澤山分捕つて來た。かかる鹵獲物は婦女たちに與えた

15) 我には汝の愛が婦人の愛よりも大切であつた。夫婦の愛や母の愛にもまさつていた。

二　主「上れ。」と曰いしかば、ダヴィドまた、「何處に上るべきか。」と云いたるに、主、「ヘブロンに。」と答え給えり。

三　茲に於いてダヴィド、その二人の妻、イエズラエル人なるアキノアムと、カルメルのナバルの妻たりしアビガイルとを伴いて上りぬ。

四　なおまたダヴィドは己と共にある人々をも率い行きしが、彼等各〻その家族を伴いてヘブロンの邑々に住めり。

五　時にユダの人々來り、其處に於いてダヴィドに注油し、ユダの家を治めしめんとしたり。

さるほどにヤベス・ガラードの人々のサウルを葬りし由ダヴィドに傳われり。

ダヴィド乃ち使者をヤベス・ガラードの人々の許に遣して、之に云わしめけるは、「汝等主に祝せられよかし、

そは汝等己が主君なるサウルにこの溫

第二章　1)大司祭アビアタルの仲介によつて。―2)ヘブロンはシケレグから行程約九時間の所にあり、ユデア第二の大都市で、同族の中央にあり、司祭の町、避難の町（書二〇）として神聖さを倍加し、その上、アブラハム、サラ、イサーク、ヤコブ、リアの墓のある所であつた。―3)ベトレヘムでの注油（母上一六・三）は多分祕密にされていたのであろうそれは何よりも先ず天主の御前に價値があつた。今度のは公然の注油で人々の前におけるダヴィド王の即位式であつた。―4)喀前二・五七。本五・三。―5)ヤベス・ガラードはヨルダンの彼岸で最强の町。―6)恰も彼らがダヴィド自身のために盡したかのように。

六　情を示して、之を葬りたればなり。六主今に慈悲と眞實とを汝等に報い給わん。なおまた我も、汝等がこの事をなせるを感謝するなり。

七　七汝等の手強く、汝等剛勇の士たれ。汝等の主君サウルは死したれ

八　ども、ユダの家我に注油してその王となせり。」と。八然るにネルの

九　子にしてサウルの軍將たるアブネルは、サウルの子イスボセト[7]を取り、之を導きて陣營の地[8]を經歷り、九之を立てて、ガラード、ゲスリ、[9]イエズラエル、[10]エフライム、ベンヤミン、及び全イスラ

一〇　エルの王となしたり。一〇サウルの子イスボセトはイスラエルの統治を始めし時、四十歳にして、二年の間治めたり。ただユダの家のみ

一一　はダヴィドに從いぬ。一一ダヴィドがヘブロンに留まりてユダの家を

一二　治めし日數は、七年と六箇月なりき。一二ネルの子アブネルと、サウ

一三　ルの子イスボセトの僕等とは陣營を出でてガバオン[11]に行けり。

一三　サルヴィアの子ヨアブ及びダヴィドの僕等出でてガバオンの池の

7)「恥辱の人」の義。本名はエスバール、即ち「バールの火（滅ぼす者）」の義。

8)ヨルダンの東の地ヤボク河の北にあつたマハナイム。（創三二・三。書一三・二六。王上四・一四）

9)ヨルダン河の彼方マナツセ族領内にある。

10)上述の順に列擧してある。イエズラエルはイッサカル族領のこと。

11)イエルサレムの北西の丘の上にあり。

一四　邊にて彼等に逢いぬ。即ち彼等出で逢うや、一は池の此方に、他は彼方に、互に相對して坐せり。[12] 一四時にアブネル、ヨアブに云いけるは、「若者等をして、起ちて我等の前に試合[13]せしめん。」と。ヨアブ答えけるは、「彼等起てよかし。」と。一五 茲に於いてベンヤミン、即ちサウルの子イスボセトの方よりその數十二人、またダヴィドの僕よりも十二人、起ちて進み出でたり。一六 しかして各人その敵手の頭を捕え、己が劍をその敵手の脇腹に突刺しければ、彼等相共に殪れぬ。故にその處の名は「勇士の畑」と稱せられたり。是はガバオンの邊にあり。一七 かくてその日いと激しき戰鬪起り、アブネル及びイスラエルの人々はダヴィドの僕等に敗走せり。一八 さて其處にサルヴィアの三子、ヨアブ、アビサイ、及びアサエルありしが、アサエル最も疾き走者にして、さながら森に住む鹿の如くなりき。一九 アサエル、アブネルを追い行きしが、右にも左にも逸ることなく、ひたすらアブネルの後を慕いぬ。二〇 時にアブネル背後を顧みて、「汝はアサエルなりや。」と云いしかば、彼、「然り。」と答えたり。二一 アブネ

12) 耶四一・一二によれば、この池は甚だ大きい湖であつた。
13) 決鬪。

ルまた彼に云いけるは、「右または左に行きて、若者の一人を捕え、その物を取れ。[14]」と。されどアサエルは彼に追い迫るを止めんとはせざりき。二二よりてアブネル、累ねてアサエルに云いけるは、「去りて我を追うことなかれ、然らずば我餘儀なく汝を地に刺し殪さん。[15]」二三さらば我、汝の兄ヨアブに向いてわが顔を擧ぐるを得じ。」と。二三然るに彼、輕んじて聽かず、他に轉ずるを肯ぜざりき。茲に於いてアブネル、槍を逆まにして彼の鼠蹊を擊ち、遂に刺したれば、彼その場にて死せり。アサエルの倒れ死したる處を通過ぐる者は皆立留りぬ。二四さてヨアブとアビサイと、逃ぐるアブネルを追い行くほどに、日沒みけるが、彼等はガバオンの荒野の道の傍にありて、谷に對える水道の丘まで至れり。二五折しもベンヤミンの裔等、アブネルの許に集まり、團結して一隊となり、一つの丘の頂に立てり。二六アブネル、ヨアブに叫わりて云いけるは、「汝の劍鏖殺にするまで荒れ狂うべきや。汝は絶望の危險なることを知らざ

14) もしも名譽が得たいなら、身分の低い兵卒の一人を殺して、その甲冑や武器を分捕れ。15) 僅少の榮譽に滿足せよ、しかして汝が生命を犧牲にしてわが生命を救う如き恩を我にかくるなかれ。それに彼はアサエルを殺せば、その兄ヨアブの復讐を受けることを怖れたのであつた。

二七 るか。いつまで民に、その兄弟を追うをやむることを命ぜざるぞ。」と。二七ヨアブ云いけるは、「主活き給う、汝もし云いしならば、民朝より既にその兄弟を追うことをやめしならんに。」と。二八茲に於いてヨアブ喇叭を吹鳴らししかば、全軍立留りて、それよりイスラエルを追わず、最早戰わざりき。

二九 二九アブネル及びその部下の人々、乃ちその夜は終夜野を歩みて、ヨルダンを渡り、三〇全ベトホロンを通過して陣營の地[16]に至りぬ。三〇またヨアブはアブネルを措きて歸るや、民を悉く集めしが、ダヴィドの僕にて缺けたる者、アサエルの外に十九人ありき。三一されどダヴィドの僕等は、ベンヤミン及びアブネルと共にありし人々を三百六十人討ちて死に至らしめたり。三二人々アサエルを取りて、之をベトレヘムなるその父の墓に葬りぬ。ヨアブと之に從う人々とは終夜歩みて、夜明けにヘブロンに至れり。

16) マハナイム。ベトホロンはヨルダンの彼方に、マハナイムは此方にある。

第三章

ダヴイド益々強くなる—アブネル、ダヴイドに誼を通ず—
アブネル、ヨアブに騙し討ちにせらる。

一　かくてサウルの家とダヴイドの家との間には、久しきに亘りて戰爭ありしが、ダヴイドは益々榮えて強くなり行くばかりなるに
二　サウルの家は日增に衰え行きぬ。　二　さてヘブロンに於いてダヴイドに子等生れしが、その長男はアムノンとて、イエズラエルの女
三　アキノアムより出でたり。[1]　三　また之に次ぐケレアブは、カルメルのナバルの妻たりしアビガイルより出で、更に三男のアブサロ
四　ムは、ゲツスルの王トルマイの娘マーカ[2]の子なりき。　四　また四男のアドニアはハギトの子、五男のサフアテイアはアビタルの子
五　にして、　五　六男のイエトラームはダヴイドの妻エグラより出でたり。　六　是等はヘブロンに於いてダヴイドに生れし者なり。[3]　六　さて、

第三章　1) 代上三・一。
2) 故にマーカはイスラエルの宗教に改宗していたのであろう。
3) ダヴイドが多くの妻を娶つたのは、自分の勢力を伸張するためであつた。ここに列記してあるその息子の中で抜んでているのは、アムノン、アブサロム、アドニアの三人であるアブサロムはアムノン

七　サウルの家とダヴィドの家との間に戰爭ありし時、ネルの子アブネル、サウルの家を掌りいたり。七然るにサウルに、アイアの娘にて名をレスファと云える妾ありしが、イスボセト、アブネルに云いけるは、八「汝何故にわが父の妾の許に入りしぞ。4)」と。彼イスボセトの言により、大いに怒りて云いけるは、「我は汝の父サウルの家と、その兄弟親戚とに溫情を示し、汝をダヴィドの手に付さざりしに、今日我はユダに對して犬の頭5)なるか。汝今日女の事にて我を責めんとすとは。九我もし主がダヴィドに誓い給いし如く彼になさずば、一〇天主アブネルにかく爲し、更に累ねてかく爲し給え、6)」一〇これ王權がサウルの家より移り、ダヴィドの玉座がイスラエルとユダとの上に、ダンよりベルサベーに及ぶまで、築かれんためなり。」と。一一イスボセトは彼を恐れたれば、何とも之に答うるを得ざりき。一二茲に於いてアブネル已の代りに、使者をダヴィドの許に遣して云わしめ

を殺させ、父に叛いて之と戰う中に殪れた。アドニアはサロモンの敵手であつて殺された（王上一・五以下參照）。

4) アブネルはレスファと關係したため、王位を窺う者ではないかとの疑惑を招いた（後にアドニアが同樣であつた如く）。

5) すなわちこの上なく輕蔑すべきもの。

6) 舊約聖書中に屢々用いられている誓の形式。

一三　けるは、「この地は誰のものぞ。」しかしてまた云わしめけるは、「我と友誼を結べ、さらばわが手汝を助け、我イスラエルをすべて汝に歸せしめん。」と。　一三ダヴィド云いけるは、「宜し我汝と友誼を結ばん。されど我汝に一事を求む、曰く汝サウルの娘ミコルを連れ來らざる内は、わが顏を見るを得ざるべし。されば、汝然なして來り、我を見るべし。」と。7)

一四　一四ダヴィドまたサウルの子イスボセトの許に使者を遣して云わしめけるは、「我がフィリスト人の包皮百枚を以て己が爲めに娶りたる、わが妻ミコルを返せ。」と。8)　一五イスボセト乃ち人を遣して、その夫にしてライスの子なるファルティエルより之を取りたり。9)　一六然るにその夫、泣きながら之に從い、バフリムまで至りしに、アブネル之に「行きて歸れ。」と云いしかば、彼歸れり。一七アブネルまたイスラエルの長老等に言

7) ダヴィドがミコルを愛していたのは、かの女が自分のため大いに盡してくれたからである。その上サウルの王女を有していると王位に對する自分の權が鞏固になった。―8) ダヴィドがイスボセトに返還を求めたのは、彼がサウル家の長であつたから。新たにサウルの娘を納れることは、全イスラエルに對し、ダヴィドが胸中にサウルを憎む念を少しも抱いていないという證據になつた。―母上一八・二七。―9) 夫は彼女を誠心誠意娶り且愛していたので

をかけて云いけるは、「汝等昨日も一昨日も、ダヴィドに汝等の王たらんことを求めたり。一八されば今然なすべし、そは主ダヴィドに告げて、〝我はわが僕ダヴィドの手によりてわが民イスラエルをフィリスト人、及びその諸々の敵の手より救わん。〟と曰いたればなり。」と。一九アブネルはまたベンヤミンにも語りぬ。しかしてイスラエルならびにベンヤミン一族の意に適う事を悉くヘブロンにあるダヴィドに告げんとて行けり。二〇かくて彼二十名の人と共に、ヘブロンにあるダヴィドの許に至りしに、ダヴィド、アブネル及び之と共に來りしその人々の爲に、饗宴を設けたり。二一時にアブネル、ダヴィドに云いけるは、「我起ちてイスラエルを悉くわが主君にして王たる汝の許に集め、汝と盟約を結び、汝をしてその心に望む如くすべてその人を治めしめん。」と。さてダヴィド、アブネルを見送りて、彼安らかに去るや、二二間もなくダヴィドの僕等及びヨアブ、强盜等を殺して甚だ多き分捕物を携え來れり。されどアブネルはダヴィドと共にヘブロンには在らざりき、そはダヴィド之を去らしめて彼安らかに出發ちたればなり。二三ヨアブ及び之と共なる全軍はその後に來りしが、ネルの子アブネルが王の許に來り、王之を遣り

二四 返して彼安らかに去りし由ヨアブに傳えられぬ。二四よりてヨアブ王の許に入りて云いけるは、「汝何をか爲し給いたる。視給え、アブネル汝の許に來りしに、汝何故彼を遣り返して去らしめ、歸らしめ給えるぞ。二五ネルの子アブネルが汝の許に來りしは、汝を欺かんが爲、また汝の出入を知り、汝のなす所を悉く知らん爲なるを、汝は知り給わずや。」と。二六かくてヨアブ、ダヴィドの許を出ずるや、ダヴィドの知らざる内にアブネルの後より使者を遣し、之をシラの井より連れ歸らしめぬ。二七アブネル、ヘブロンに歸るや、ヨアブ彼と語らんとする如く裝いて之を門の中に引き行き、其處にてその鼠蹊を擊ちて之を殺し、已が兄弟アサエルの血の復讐を遂げたり。10) 二八既にこの事ありて後、ダヴィド之を聞きて云いけるは、「ネルの子アブネルの血に就きては、我とわが王國、主の御前に永久に罪なし。二九そはヨアブの頭とその父の全家とにかかれかし。ヨアブの家には淋疾の者、癩病の者、紡錘を持つ者、11) 刄に殪るる者、食に困る者、絶ゆることと

10) アサエルは戰死したのだし、それにアブネルから二度も警告を受けていたのでヨアブには血の復讐をする權利などなかった。それ故彼の行爲は闇討ちであった

11) 女の如く柔弱な者。

三〇 なかれ。」と。[12] 三〇ヨアブとその兄弟アビサイとは、かくの如くにして
アブネルを殺せり。そは彼、ガバオンに於いて戰鬪の時に、彼等の兄
三一 弟アサエルを殺したればなり。三一さてダヴィド、ヨアブ及び己と共に
ある民一同に云いけるは、「汝等の衣服を裂き、亞麻布を纏いて、ア
ブネルを葬る前に嘆け。」と。しかしてダヴィド王自らその柩に從い
三二 ぬ。三二かくてヘブロンにアブネルを葬りし時、ダヴィド、アブネルの
三三 墓畔にて聲を擧げて泣き、民も亦皆泣きたり。三三時に王アブネルを
偲び、嘆き悲しみて云いけるは、「アブネルの死したるは、臆病なる
三四 者の普通に死する如くならず、三四汝の手は縛められず[13] 汝の足は枷に
重からざりき。されど人々が邪惡なる子等の前に仆るる如く、汝は仆
三五 れたり。」と。民皆之を繰返して、彼の爲に泣きぬ。三五衆人皆なお白
晝なる内に、ダヴィドと共に食を攝らんとて來りし時、ダヴィド誓い
て云いけるは、「我もし日沒の前に、パンその他何にても味わうこと

12) アブネルはダヴィドの客たる權を享けながらなお且もてなし主の都の門前で殺された。故にダヴィドはその犯人に復讐する義務があつたのにヨアブを怖れて、（三九節）それを果さず、單に呪詛を以て天主に復讐して下さるよう、お頼みしたばかりであつた。

13) 罪人のように。

三六 あらば、主我にかく爲し、更に累ねてかく爲し給え。[14]」と。三六民皆聽きて悅びたり。即ち王の爲したる所は悉く民一同の眼に善しと見えしなり。

三七 三七しかしてその日民皆、イスラエル皆、ネルの子アブネルを殺したるは王の所行に非ざることを曉りぬ。三八王またその僕等に云いけるは、「今日イスラエルに於いて、王侯にして偉大なる者殪れしを汝等知らずや。三九我は注油せられし王なれど、なお纖弱し。サルヴィアの子なるこの人々は、我にとりて御し難し。主惡を爲す者に、その惡に應じて報い給え。」と。[15]

第四章

イスボセト二人の僕に殺さるーダヴィドその殺したる者を罰す。

一 一サウルの子イスボセト、アブネルのヘブロンに於いて殪れし由を聞き、その手弱くなりぬ。されば全イスラエル狼狽えたり。二さてサウルの子に、徒黨の長二人あり、一人は名をバーナと云い、他はレカブと云いて、ベンヤミンの裔なるベロト人レンモンの子等なりき。蓋しベロト[1]もベンヤミ

14) 本章九節參照。

15) しかし少くとも彼は彼らの殘忍に反對し、之を天主の御裁斷に訴えた。

第四章 1) イエルサレムの北にある。

三 ンの中に數えられたるなり。三ベロト人はゲタイム[2]に逃げて、その時まで其處に留まりぬ。四サウルの子ヨナタスに跛の子あり。イエズラエルよりサウルとヨナタスとの報知來りし時齡五歲なりしが、乳母之を抱きて逃げしに、その急ぎ逃げんとしたる時、彼落ちて跛となりしなり。その名は

五 ミフイボセトと云えり。[3]五ベロト人レンモンの子等なるレカブ及びバーナ來りて日の熱き頃イスボセトの家に入りしに、正午なるに彼その床の上に

六 眠れり。また家の門番も麥を洗いおる內に寢入りたり。六レカブ及びその兄弟バーナ、乃ち麥の穗を取り、密かに家の中に入りて彼の鼠蹊を擊ちて

七 逃げ去りぬ。七即ち彼等家の中に入りし時、彼寢室にてその床の上に眠り

八 いたれば、之を擊ち殺し、その首を取りて、終夜荒野の道を[4]行き、八ヘブロンにあるダヴィドの許に、イスボセトの首を持參し、王に云いけるは「視給え、汝の生命を求めし汝の敵サウルの子イスボセトの首を。主今日かくわが主君なる王の仇を、サウルとその後胤とに報い給えり。」と。九然

2) この町はベンヤミン領內にあるが、その正確なありかは不明。

3) サウル家出の王位繼承者としては、もう一人病身で全く統治に不向きな子供しか殘つていなかつた。

4) マハナイムからヨルダンへ。

るにダヴィド、ベロト人レンモンの子等なるレカブとその兄弟バーナに答えて之に云いけるは、「諸々の艱難よりわが生命を救い給う主は活き給う、
一〇 我に告げて、〃サウル死せり。〃と云いし者は、己吉報を齎せりと思いたれど、我は之を捕えて、その報告の故に報賞を得べかりし彼をシケレグに殺
一一 したり。[5] ニましして今は惡人輩の無辜人をその家の中にて、その床の上に殺したるを、我爭で汝等の手より彼の血を求め、[6] 汝等を地より除かざるべけ
一二 んや。」と。ニニかくてダヴィド、その僕等に命じたれば、僕等彼等を殺して、その手足を切り放し、之をヘブロンの池の畔にかけ曝したり。されどイスボ
一三 セトの首は、之を取りてヘブロンに在るアブネルの墓に葬りぬ。[7]

第五章

ダヴィド注油せられてイスラエル全國の王となる—ダヴィド、イエルサレムを取りて其處に住む—彼フィリスト人を擊破す。

一 時にイスラエルの諸族、皆ヘブロンにあるダヴィドの許に來りて云いけるは「視給え

5) 本一一。
6) 汝等に彼の血の復讐をして。
7) 本三。三二。

二　我等は汝の骨肉なり。1) 三且又サウルが我等の王たりし昨日も一昨日も、イスラエルを將いて出入する者は汝なりき。なお主も汝に曰く、〃汝わが民イスラエルを牧し、イスラエルの長となるべし。〃」2) 三イスラエルの長老等も亦、ヘブロンなる王の許に來りしかば、ダヴィド王ヘブロンに於いて彼等と主の御前に盟約を結びたり。茲に於いて彼等ダヴィドに注油し、イスラエルの王となしぬ。3) 四ダヴィドは統治を始めし時三十歳にして、4) 四十年の間、治めたりき。5) 五即ちヘブロンにありては七年六箇月の間、ユダを治め、イエルサレムにありては三十三年の間イスラエルとユダとを全て治めしなり。六さて王及び彼と共にある人々皆、イエルサレムに行きてその地の住民なるイエブス人の許に至りしに、彼等ダヴィドに云いけるは、「汝、〃ダヴィドは此處に入る能わざるべし。〃」と云う盲者と跛者6)

第五章　1) 代上一一・一。2) 母上一九・一三、一六。二五・三〇。―3) 本二・四。―4) ラテン語「Filius triginta annorum」（三十歳の子）はヘブレオ語の云い方。―5) 王上二・一一。―6) これは彼らが守護神として周壁の上に立てておいた偶像と解してよかろう。すなわち彼らは、自分達の神々に對して、ダヴィドが何もすることができまいと信じていたのであつた。しかしイエブス人が、イスラエル人を嘲弄するため、盲人跛者を石垣の上に立た

七　とを追拂うに非ずば、此處に入る能わじ。」と。七然るにダヴィド、
八　シオンの城[7]を取りぬ。是ぞダヴィドの市なる。八即ちダヴィドは
その日、イエブス人を討ち、家々の筧[8]に達して、ダヴィドの心に
憎む盲者、跛者を追拂う者の爲に賞を設けたり。されば諺に云う、
九　「盲者と跛者とは宮に入る能わず。」と。九次いでダヴィドその城に
住みて、之をダヴィドの市[9]と稱したり。しかしてメロより内部に
一〇　かけて周圍に建築[10]をなせり。一〇かくて彼は益々榮え大いになり行
二　くばかりにて、主萬軍の天主之と共に在しき。[11]一一またチロの王ヒ
ラムもダヴィドの許に使者及び杉材、大工、垣を造る石工などを遣
一二　りぬ。彼等乃ちダヴィドの爲に家を建てたり。[12]一二茲に於いてダヴ
イドは、主が己をイスラエルの王と確定め給いし事、及びその民イ
一三　スラエルに對し己が王位を高くし給いし事を曉れり。一三さてダヴィ
ド、ヘブロンより來りし後、イエルサレムより更に妾と妻とを納れ

せておいたのだという説をなす人々もある。―7)三つの深い谷に圍まれたシオン城。―8)水をひく樋（シオン城の井）。9)彼がシオン城を選んで己が居城となしイエルサレムを首都としたのは、そこが自然の要害をなし、國の中央に位していたため。―10)周壁の一方に塔や砦など、固めの工事。―11)代上一一・九。―12)代上一四・一。詩二九・一。

一四　しかば、また他に息子娘ダヴィドに生れたり。13)
一五　一四そのイエルサレムに於いて生れし者の名は次の如し、サムア、ソバブ、ナタン、サロモン、一五イ
一六　エバハル、エリスア、ネフエグ、一六ヤフィア、エリサマ、エリオダ、エリ
一七　ファレト。一七然るにフィリスト人、ダヴィドの注油せられてイスラエルの
王となりし由を聞き、ダヴィドを捕えんとて皆上りしが、14)ダヴィド之を
一八　聞くや城砦に下れり。15)一八フィリスト人は來りてラファイムの谷に散兵線
一九　を布きたり。16)一九時にダヴィド主に問いて云いけるは、「我フィリスト人
の許に上るべきか。また汝彼等をわが手に付し給うか。」主ダヴィドに曰
いけるは、「上れ、そは我フィリスト人を汝の手に付すべければなり。」と。
二〇　二〇茲に於いてダヴィド、バール・ファラシムに至り、彼處に彼等を擊破
二一　りて云いけるは、「主水の散る如く、わが前にわが敵を打散らし給えり。」
と。かるが故にその處の名はバール・ファラシム17)と稱ばれたり。三彼
等其處にその偶像を遺棄て行きしかば、ダヴィドとその部下の人々之を取

13) 代上三・九。
14) フィリスト人は最初北方にのみ敵對していたが、ダヴィドが國王となつてからは、之に向かつて來た。
15) アドウラム
16) 代上一四・九。―17) 師團長。

二二 れり。[18] 二三 然るにフィリスト人またもや上り來りて、ラファ
イムの谷に散兵線を布きたり。二三 ダヴィドまた主に問いける
は、「我フィリスト人に對いて上るべきか。また汝彼等をわ
が手に付し給うか。」主答え給いけるは、「彼等に對いて上る
なかれ、その背後にまわりて、梨樹の前より之を襲え。二四 し
かして汝、梨樹の梢に足音を聞かば、戰鬪を始むべし、その
時主は汝の面前に出でて、フィリスト人の陣營を討ち給うべ
ければなり。」と。二五 ダヴィド乃ち主の己に命じ給える如く
になして、フィリスト人を擊破り、ガバーよりゲゼル[19]に至
りぬ。

18) フィリスト人は、曾てイスラエル人が契約の櫃を持つて行つたように、偶像を持參したのである。— 19) ゲゼルはカナアンの都市であつたが、征服後（書一〇・三〇。一一・二一。）エフライム人に與えられた。今はテルゼエゼルと稱ばれ、アキル即ちアツカロンの東にある。

第六章

ダヴィド、カリアテイアリムより契約の櫃を持歸る—オザ之に觸れ神罰を蒙りて死す—櫃オベデドムの家に安置せられ、次いでイエルサレムに移さる。

一　さてダヴィドは、再びイスラエルの精鋭を總て、即ち三萬人を集めたり。二　しかしてダヴィド、起ちてユダの人々の内己と共にある民を悉く率い行き、天主の櫃を持來らんとせり。1) これに向かいてこそ、この上の智天使に坐し給う萬軍の主の御名を稱うるなれ。2) 三　即ち彼等天主の櫃を新しき車に載せて、ガバーなるアビナダブの家より引き出だせり。アビナダブの子等なるオザとアヒオ、その新しき車を驅りぬ。3) 四　彼等

第六章　1) 殆ど七十年も前から契約の櫃のあつたカリアテイアリムから（母上六・二一及び七章）。ダヴィドは支配權を確立してから、たゞヘリがなおざりにしていた祭祀の整備のみを心がけた。それは本當の聖物、契約の櫃をカリアテイアリムから持つて來て、常に王都に安置すれば、最もよく行うことができた。—2) 代上一五・六。—3) 敬畏の念から、まだほかの用に一度も使わぬ車を採用した（母上六・七）。しかしこれも律法に背いていた。それによれば（民四・一五）、契約の櫃はレヴイ人が運ぶことになつているからである。フイリスト人はこれを知らなかつたが、イスラエル人は知つていた。それで後に契約の櫃はシオンへも

五　ガバーなるアビナダブの家より之を牽き出すや、アヒオ天主の櫃を護りて、櫃の前に行けり。4) 六　ダヴィド及びすべてのイスラエルは、主の御前にありて、木もて造れる樣々の樂器、小琴、琵琶、5) 皷、金屬板、6) 鐃鈸7) を鳴らしたり。六　かくて彼等ナコンの打禾場に至りし時、オザ天主の櫃に手を伸べて之を抑えたり、そは牛跳ねて、櫃傾きたればなり。七　主オザに對して激しく怒り、その輕卒の故に之を擊ち給いしかば、彼その場に於いて天主の櫃の傍に死せり。8) 八　されどダヴィドは、主オザを擊ち給いしに由りて悲しみぬ。しかしてその處の名は今日に至るまで、〃オザの打擊〃と稱ばれたり。9) 九　ダヴィドその日太く主を恐れて云いけるは、「主の櫃いかでかわが許に入るるを得べき。」と。一〇　ダヴィド主の櫃を己が許に差向けて、ダヴィドの市に入るるを欲せず、之をゲト人なるオベデドムの家10) に差向

運ばれた。―4) 母上七・一。―5) 十二絃を有し、指で奏でる樂器。―6) 四角な金屬の薄板から成る樂器、時々鈴が付いていた。―7) 鐃鈸は青銅製で大きく廣いものであつた。8) 櫃に觸れたのは、當然取るべき恭々しい態度でなかつた。この死は墮地獄の印ではない。彼が命を落したのは、全イスラエルへの力强い警告とする思召。―9) 代上一三・一。―10) オベデドムは代上一五・一七以下によれば、メラリ一門のレヴイ人であつた。その家は

一一　けたり。ニかくて主の櫃三箇月の間ゲト人オベデドムの家に
一二　留まりしが、主オベデドム及びその一家を祝し給えり。三主
　　天主の櫃の爲にオベデドムとそのすべての物とを祝し給いし
　　由はダヴィド王にも傳わりたり。さればダヴィド、行きて天
　　主の櫃を、オベデドムの家よりダヴィドの市に、歡喜びて持
　　來りしが、七組の歌隊と、犧牲の犢ダヴィドと共にありき。11)
一三　主の櫃を舁く者六歩を行くや、彼牡牛と牡羊とを屠り献げ
　　たり。12)　一四　しかしてダヴィド、力の限り主の御前に舞い踊り
　　ぬ。13)　因に彼は亞麻の肩衣を纏い居たり。14)　一五　かくてダヴィ
　　ド及びイスラエルの全家、歡呼し喇叭を吹鳴らしつつ、主の
　　契約の櫃を搬び行けり。一六主の櫃ダヴィドの市に入りし時、
　　サウルの娘ミコル15)窓より望みてダヴィドが主の御前に躍り
　　つ舞いつせるを見、その心に之を蔑みたり。一七人々主の櫃を

必ずやそこから極く近い所にあり、イエルサレムから僅か離れていたと思われる何となれば二回目の行列は長時間を要しなかつたらしいから。―11)代上一五・二五。―12)代上一五・二六。13)契約の櫃の前で。舞踊は昔から聖なる歡喜の表現として、珍らしいものではない。―14)ダヴィドは王の裝飾品をすべて取り除いていた。15)傲慢なサウル王の娘で氣位の高いミコルは、契約の櫃の前で平民の如く心の敬虔な歡喜を示したダヴィドの謙遜を見て躓いた。

一八　昇き入れて、ダヴィドがその爲に張りたる幕屋[16]の中央なるその處に之を据ゑぬ。次いでダヴィド、主の御前に燔祭及び和祭を献げたり。一八しかして彼燔祭及び和祭を献げ終うるや、萬軍の主の御名によりて民を祝せり。[17]

一九　一九またイスラエルの全會衆に對して、男にも女にも、各々にパン一箇、牛の燒肉一片、及び油灼りの麥粉を分配したり。かくて民皆いづれもその家に歸り、

二〇　二〇ダヴィドも亦己が家を祝せんとて歸りぬ。然るにサウルの娘ミコル、ダヴィドを出で迎えて云いけるは、「今日イスラエルの王は如何に榮ありしぞ、その僕達の婢等の前にその身を露し、道化者の一人が裸となる如く、裸となり給えり。」と。[18]

二一　二一ダヴィド、ミコルに云いけるは、「汝の父より、またその一家よりも、我を選びて、イスラエルに主の民の君たることを我に命じ給いし主の御前に於いては、

二二　二二我戯れて、今爲したるよ

16) ダヴィドは一つの專用幕屋を建てて、モイゼが設けたのはガバオンにその儘殘しておいた（代上一六・三九。二一・二九）。

17) 祝福、犧祭、天幕を張ることなどは、ダヴィドが自分でしたのではなく彼が發企して、させたのである。シオン城の構築もまた然り（本五・九）。

18) 裸になるとは、ダヴィドが、小アジアで貴人の人前に出る時必ず着する袍（うわぎ）を着ず、下衣の上へじかにエフオドを着けたことを云う。

二一　りも更に己を賤しうし、わが眼に卑き者とならん。19)　さらば汝の云いし婢等には、我一入榮ありと思われん。」と。　三この故にサウルの娘ミコルには、その死する日まで子生れざりき。20)

19) もし主の榮光を揚げるに必要ならば、私は甘んじてどんな卑しい役割をでも勤めるつもりである。しかしお前は、不從順のために王位を失つたお前の父のことを思うがよい。―20) かの女はその傲慢ゆえに天主から辱しめられた。子のないのは、イスラエル人の考えでは、女にとつて無上の恥辱であつた。

第七章

ダヴィド聖殿の建立を志しその報いに大いに子孫を恵まれんと約せらるー―ダヴィドの新禱と感謝。

一　さて、王その家に坐し、1)　主彼のすべての敵に對して彼に遍く安息を賜いし時のことなりき、　二彼、預言者2)　ナタンに云いけるは、「我は杉の材の家に住むに、天主の櫃は革皮の中に置かれたるを、汝は見るや。」3)　三ナタ

第七章　1) 自分のいつもの舘にいた。―2) ダヴィドの治世のあとに、かなり重要な役割を演ずるこの預言者の名が出てくるのは、これが始めて。王上一・一〇、二二など參照。―3) ダヴィドは自分の住居を天主のよりも堅固で立派にするのを、許されないことと思つた。―代上一七・一。

ン、王に云いけるは「主汝と共に在すにより、行きて凡て汝の心にある事をなし給え。」四然るにその夜のことなりき、五視よ、ナタンに主の御告あり、曰く「行きてわが僕4)ダヴィドに云え、主はかくぞ曰う、〃わが爲に住むべき家を建てんとするは汝なりや。六實に我はイスラエルの裔等をエジプトの地より導き出せし日より今日に至るまで、家に住いたることなく、ただ幕屋の中に歩めり。七曾て我はイスラエルのすべての裔等と共に跋渉り及び天幕の中に來りしいずれの處に於いても、我がわが民イスラエルを牧せよと命じたるイスラエル族の一人に語りて、〃汝等何故わが爲に杉材の家を建てざる〃と云いしことありや。〃八されば今汝わが僕ダヴィドにかく云うべし、萬軍の主かくぞ曰う、〃我は汝を羊追えるその牧場より取りて、わが民イスラエルの君となし、5)九何處にもあれ汝の行く處に汝と共にありて、汝の面前より汝の敵を悉く滅し去り、地に在る偉大なる者の名の如く汝の名を偉大ならしめたり。一〇また我はわが民イスラエルの爲に處を定めて之を植え、彼等をして其

4) モイゼに對しての如く、尊重と愛情との稱號。民一二・七―八參照。
5) 母上一六・一三。詩七七・七〇。

一一　處に住わしめ、最早煩いなからしめん。なお邪惡の子等も前の如く、累ねて彼等を惱ますことなかるべし。一二そは即ち我が士師をわが民イスラエルの上に立てし日より以來をさすなり。我汝の諸の敵より汝を安らかならしめん。主また汝に預言し給う主汝の爲に家を作り給わんと。6) 一三しかして汝日數盡きて汝の父祖と共に眠りなば、我汝の腹より出でん汝の胤を、汝の後に起し、その王國を確立せん。7) 一三彼はわが名の爲に家を建てん、我はその王國の座を永久に不動ならしめん。8) 一四我は彼の爲に父となるべく、彼はわが爲に子となるべし。彼もし惡しき事をなさば、我人の杖もて、人の子の笞打もて、之を懲さん。9) 一五されどわが憐憫を、わが面前より除きしサウルより取りたる如く彼より取去る事は爲さじ。10) 一六汝の家と汝の王國とは、汝の面前に永遠に存續し、汝の座は毎までも堅かるべし。"」11) 一七凡て

6) 天主は汝に子孫を與えこれに主權を保持させて下さろう。―7) この預言は一部サロモンに關係しているが、より以上に聖書中にダヴィドの子と稱ばれておいでになるキリストに關係している。彼は眞の聖殿たる敎會の建設者に在し、その無窮の王位は決して倒れることがないであろう。―王上八・九。―8) 王上五・五。9) 裁くに峻嚴苛酷でなくわが子を懲治する父親のように。―代上二二・一〇。來一・五。―10) 詩八八・四、三七。―11) この

是等の言に循い、凡てこの啓視によりて、ナタン、ダヴィドにかく語りぬ。一八さればダヴィド王、入りて主の御前に坐し、12)云いけるは、「主なる天主よ、我誰なれば、またわが家何なれば、此處まで我を導き來り給いしぞ。一九されど主なる天主よ、是は汝の御眼になお小さき事にして、汝は汝の下僕の家の、遠き後の事を語り給えり。主なる天主よ、蓋し是はアダムの法なり。13)二〇ダヴィドまた累ねて何をか汝に云うを得ん。主なる天主よ、實に汝は汝の下僕を知り給う。二一汝の言の爲、又汝の心に循いて、汝とこの數々の大いなる事をなし二二之を汝の下僕に知らしめ給えり。二三この故に、主なる天主よ、汝は偉大に在す、そは凡そ我等己が耳もて聞ける所にては、汝に匹敵う者なく、汝の外に天主あらざればなり。二四また地にある何れの國民か汝の民イスラエルの如くなる。天主その爲に行きて之を贖い、14)御自らの民となし御名を揚げ、且之が爲大にして恐ろしき事を地上

語は大天使ガブリエルが聖マリアにその天主の御母になるべき旨を告げた時、引用している。詩八八・三八。來一・八參照。―12)聖幕屋内にある契約の櫃の前にいつもよりも長くいて。―13)是は人間の法なり。即ち、主よ汝は人がその仲間と友がその友と交わる如く親しく、私を扱つて下さいました。14)エジプトの奴隷たる境涯から。

に於いて、汝がエジプトより、その國民と神々とより、贖いて御自らのものとなし給いし民の面前に行い給えり。15) 二四實に汝は御自らの爲に、汝の民イスラエルを窮りなく民16)と定め給えり。しかして主なる天主よ、汝は彼等の天主となり給いぬ。二五されば今、主なる天主よ、汝が汝の下僕とその家とに就きて曰いし御言を永久に守り、汝の曰いし如くに爲し、二六御名を萬代までも大ならしめて、〃萬軍の主こそイスラエルの天主なれ。〃と云わしめ給え。さらば汝の僕ダヴィドの家は、主の御前に搖ぎなきものとならん。二七そは、萬軍の主、イスラエルの天主よ、汝その僕の耳に顯し示して、〃我汝の爲に家を建てん。〃と曰いたればなり。さればこそ汝の僕、その心の中にこの祈禱を汝に献ぐるを得たるなれ。二八さて主なる天主よ、汝は天主なれば、汝の御言は眞なるべし。汝は實に是等の善きことをその下僕に告げ給えり。二九故に今よりして、汝の下僕の家を祝し、永久に汝の御前にあらしめ給え。其は、主なる天主よ、汝之を曰い、汝の御祝福によりて汝の下僕の家は永遠に惠を得べければなり。」

15) ヤーヴェはイスラエルの民に奇蹟を行つて、御自分が他の民族の神々よりも高きことを示しを給うた

16) 天主の選民

第八章

ダヴィドの勝利、及びその諸將。

一 さてこの後ダヴィド、フィリスト人を討ちて之を挫くことあり、ダヴィド、フィリスト人の手より稅の勒を取れり。[1] 二 彼またモアブを討ち、之を地に臥さしめ、繩もて之を測りぬ。即ち測るに二條の繩を以てし、一條は殺すべき者に、一條は生かしおくべき者に用いたり。[2] かくてモアブは貢を納めて、ダヴィドに臣事うるに至れり。[3] 三 ダヴィド更にソバ[3]の王ロホブの子アダレゼルがエウフラト河を領せんとて出征きし時、之を討てり。[4] 四 しかしてダヴィド、彼の方より騎兵一千七百人、

第八章 1) 代上一八・一、二。—2) 軍兵は地上に體と體と合わせてギッシリ並び臥させられ、それからはかり繩ではかられ、生死をきめられた。この恐ろしい行爲は昔の戰爭の習慣に從つて判斷しなければならぬ。當時の戰勝者の權利からすれば、ダヴィドは敵をみなどろしにさせることもできたわけである。なぜダヴィドがモアブ人に對してかくも嚴しい流血の處罰を行わせたかは、不明である。彼はそれまで彼らと仲がよかつたし（母上二二・三以下）、またモアブの女ルトによつて、彼らと血のつながりがあつた。—3) エウフラト河とダマスコとの間にある。—4) 代上一八・三。

五　歩兵二万人を虜とし、車索く馬は、その中車百輛分を残して、悉くその筋を切りたり。[5] 五　ダマスコのシリア人、ソバの王アダレゼルを援けんとて來りしかば、[6] ダヴィド、シリア人二万二千を討取りぬ。六　かくてダヴィド、ダマスコのシリアに守備兵を置き、シリアは貢を納めてダヴィドに臣事うるに至りぬ。主また萬事にダヴィドを、何處にもあれその行く處に於いて護り給えり。七　なお、ダヴィドはアダレゼルの僕等の有てる黄金の武器[7]を取りて、之をイエルサレムに持ち來りぬ。八　ダヴィドまた、アダレゼルの市なるベテとベロトとより、甚だ多量の青銅を取れり。九　然るにエマトの王トウ、ダヴィドがアダレゼルの軍を悉く撃破りしを聞き、一〇　トウその子ヨラムをダヴィド王の許に遣し、之に祝賀の挨拶を述べ、且感謝せしめたり。其は彼アダレゼルと戰いて、之を撃破りたるが故なり。蓋しトウはアダレゼルの敵たりしなり。一一　さて彼の手には金の器、銀の器、青銅の器ありしかば、ニダヴ

5) 馬は騎乘用でなくて戰車牽引用であつた。當時騎乘用にすることはまだ知られていなかつたのである。イスラエルには戰車が一輛もなかつたから、ダヴィドは多分自分の凱旋を飾るための百頭を除き、馬を殘らず跛にしてしまつた

6) 最初の敗戰の後本一〇・六參照。

7) 黄金の板を張つた楯らしい。

一二　イド王之を、その征服えたる諸國より獲て献げたる銀、金と共に、主に献げたり。一三そは即ち、シリア、モアブ、アンモンの裔等、ペリシテ人、及びアマレクより獲たる物ならびにソバの王ロホブの子アダレゼルより奪いたる物なり。8)

一三　ダヴィドまたシリアを取りて歸るや、鹽の谷にて一万八千人を屠り9)名を成したり。一四彼イドウメアに監守を置き、守備隊を駐めたれば、エドム遍くダヴィドに臣事うるに至りぬ。主また万事にダヴィドを、何處にもあれその行く處に於いて護り給えり。一五かくてダヴィドは全イスラエルを治めぬ。10)ダヴィドまた審判をなして、そのすべての民に正義を行いたり。一六さてサルヴィアの子ヨアブは軍に將たり、アヒルドの子ヨザファトは史官、一七アキトブの子サドク及びアビアタルの子アキメレク11)は司祭、サラ

8) ダヴィドは自分では聖殿を建立しなかつたが、それに必要な物は悉く準備した。これによつて聖殿建立に關する話の筋道が明らかになる。―9) ダヴィドがシリアに出征した隙に、イドウメア人が侵入したのである。

10) ダヴィドはイスラエルをカナアン人の手から解放すると共にイスラエルを統一ある民とするために必要なことは何でもした

11) アキメレクは、サウルがアビアタルの父及び他の八十五人の司祭を殺させた時ダヴィドの許に逃げて來たアビアタルの子。母上二二・一一以下参照。

一八　ヤは書記官、一八ヨイアダの子バナヤはケレティ及びフェレティ[12]の長たり、しかしてダヴィドの子等は司祭たりき。[13]

12)王の近衛隊を作つていた外人二部隊。本一五・一八。二〇・七、二三参照。—13)ここにダヴィドの子等がそうであつたと記してある司祭（ヘブレオ語コハニム）とは多分この場合役人を意味しているのであろう。代上一八・一七参照。

第九章

ダヴィド、ヨナタスのためにその子ミフイボセトに對し厚意を盡す。

一　一時にダヴィド云いけるは、「汝等サウルの家中にて、我がヨナタスの爲に[1]情を之にかくべき者、なお殘れりと思うや。」と。二さてサウルの家に、名をシバと云う僕ありしが、王彼を己が許に召びて之に云いけるは、「汝はシバなるか。」彼云いける

第九章　1)ダヴィドは友情溢れる彼のちかいを忘れなかつた。母上二二・一四以下四二を參照。

三　は、「汝の僕我なり。」三王乃ち云いけるは、「サウルの家中にて、
四　わが之に天主の御憐憫を致すべき者、なお残れりや。」シバ、王
に云いけるは、「ヨナタスの子の、足萎えたるがなお残れり。」
四　「そは何處にか在る。」と云いしに、シバ、王に云いけるは、「視
五　よ、彼はロダバルにあるアミエルの子マキルの家に在り。」と。
五　茲に於いてダヴィド王、人を遣し、ロダバルの、2)アミエルの
六　子マキルの家より、彼を連れ來らしめたり。六かくてサウルの子
七　なるヨナタスの子ミフィボセト、3)ダヴィドの許に至るや、平伏
八　して敬禮したるに、ダヴィド「ミフィボセトなるか。」と云いし
七　かば、彼「汝の僕、御前にあり。」と答えたり。七ダヴィド彼に云
八　いけるは、「恐るるなかれ、我汝の父ヨナタスの爲に、必ず汝に
　　情をかけ、汝の父サウルの畑を悉く汝に返し與えん。しかして
　　汝は毎もわが食卓にてパンを食すべし。」と。4)八彼之に敬禮して

2) ロダバルはヨルダンの東の地にある一都市
3) ミフィボセトはサウルの死んだ時五歳であつた（四・四）。それでダヴィドが万人に認められた時には十二歳であつた（五・五）が、今は既に小さい男兒まである。―4) 財産は殆んどサウルの子孫の所に殘つていたのであろうから、ダヴィドはただその權を確認しただけに過ぎない。王の食卓からパンを食するのは、大なる榮譽。かかる榮譽を與えられた者

云いけるは、「汝の奴僕たる我、何者なればとて、汝死せる犬に等しき我に目をかけ給うや。」と。九王次いでサウルの僕シバを召して之に云いけるは、「凡てサウルの所有物とその全家とは、我之を汝の主人の子に
一〇與えたり。一〇されば汝、汝の子等及び汝の僕と共に、彼の爲に地を耕し汝の主人の子に食物を取り來りて之を扶養うべし。されど汝の主人の子ミフィボセトは、毎もわが食卓にて食すべし。」と。さて、シバには十
一一五人の子と、二十人の僕とありき。一一シバ、王に云いけるは、「わが主君王よ、汝が下僕に命じ給いし如く、汝の下僕然爲さん。またミフィボ
一二セトは王子の一人の如く、わが食卓にて食すべし。」と。一二ミフィボセトには、名をミカという若き子あり、シバの家の親戚皆ミフィボセトに
一三仕えたり。一三ミフィボセト乃ちイェルサレムに住みたり。其は彼毎に王の食卓にて食したればなり。彼は兩足共に跛えいたりき。

には、多分定まつた席があつてあまり度々缺席できなかつた。それでダヴィドは政治的にも賢明な措置を取つたわけである。

第十章

アンモン人ダヴィドの使者を辱しむ—アンモン人シリア人を援軍に雇い入れたれど、その援軍と共に破らる。

一 さてこの後アンモンの裔等の王死して、その子ハノン之に代りて治むる

二 に至りしが、ダヴィド云いけらく、「我、ナースの子ハノンに、その父が我に對して憐憫をかけたる如く、1) 憐憫をかけん。」と。かくてダヴィド、その父の死に就き之を慰めんとて、その僕等を遣しけるが、ダヴィドの僕

三 等、アンモンの裔等の地に至りしに、三アンモンの裔等の長等、その主君ハノンに云いけるは、「汝、ダヴィドが汝の父を敬う故に、慰問使を汝の許に遣したりと思うや。ダヴィドがその僕等を汝の許に遣したるは、寧ろ

四 市を探り偵い、2) 之を滅ぼさん爲ならずや。」と。四茲に於いてハノン、ダヴィドの僕等を捕えて、その鬚の半を剃り落し、その衣服を半より臀のあ

五 たりまで切り去りて、彼等を遣り返せり。3) 五人この事をダヴィドに告ぐる

第十章 1) 彼がサウルを避けて逃げていた時のことであつたらしい。 2) スパイ行爲をする。 3) 苦行や服喪の印としては鬚を全部剃り落す（賽一五・二。耶四八・三七。結七

や、彼人を遣して彼等を迎えしめたり。是、その人々太く恥じたればなり。しかしてダヴィド彼等に命じけるは、「汝等の鬚の伸ぶるまで、イェリコに留まり、然る後歸り來れ。」

六 と。六さてアンモンの裔等、己がダヴィドに侮辱を加えしを見、人を遣してロホブ[4]のシリア人とソバ[5]のシリア人との歩兵二万人、及びマーカ[6]の王より一千人、イストブ[7]より一万二千人を雇い入れたり。七ダヴィドは之を聞くや、ヨアブと戰士の全軍とを遣せり。八アンモンの裔等、出でて門の入口に戰列を布きけるが、ソバ、ロホブ、イストブ、及びマーカのシリア人等は、別に離れて野に在りき。九さてヨアブ、己に對し前後より戰いの備え成れるを見、イスラエルの總べての精鋭の中より選りて、シリア人に對し之に陣を布かしめしが、一〇殘餘の民をば、その兄弟アビサイに付したるに、彼

・一八)。鬚を半分剃り落されるのは、鬚が男子の主要な飾りであるだけに、この上ない恥辱である。衣服のうしろを足の所から臀の上まで切り取つたのは、ダヴィドの使者達を見つかつた間諜として嘲弄するため

4) ロホブ朝。―5) 本八・三註參照。―6) マーカはその地の北部にあり、アンモン人の小國であつたか、又はあまり資力がなかつたかしたのであつた。―7) アンモン人は侮辱を加えた後、謝罪する代りに、暴力に訴えるのである。

一一　アンモンの裔等に對し戰列を布きたり。
一二　時にヨアブ云いけるは、「シリア人もし我に手剛からば、汝我を助くべし。されどアンモンの裔等もし汝に手剛からば、我汝を助けん。
一三　汝勇ましかれ、我等己が民と、我等の天主の市との爲に戰わん、また主はその善しと欠し給う所を爲し給わん。」と。
一四　かくてヨアブ及び彼と共にある民、シリア人に對し戰鬪を始めしに、彼等直にその面前より逃げ去れり。一四アンモンの裔等、シリア人の逃げたるを見るや、彼等も亦アビサイの面前より逃げて市に入りぬ。よりてヨアブ、アンモンの裔等の許より歸り、イエルサレムに至れり。8)
一五　茲に於いてシリア人は、己等がイスラエルの前に敗れしを見、相集まりしが、一六折しもアダレゼル、人を遣し、河の彼岸にあるシリア人を導き出し、その軍勢を引き來らしめたり。アダレゼルの軍の長ソバク、彼等に將たり。一七然るにこの事ダヴィドに傳えらるるや、彼すべてのイスラエルを糾合し、ヨルダンを渡りてヘラムに至りぬ。シリア人乃ちダヴィドに對し戰列を布きて、之と戰いたり。一八されどシリア人イスラエルの面前

8) 多分季節があまり遲くなりすぎていたので、町の包圍を試みずに本一一・一参照。

より逃げ走れり。ダヴィド時にシリア人の戰車七百、騎兵四万を擊滅し、また軍將ソバクを討ちて之を即死せしめたり。一九されば、アダレゼルを助けたる王等、皆そのイスラエルに敗れしを見て恐れしが、イスラエルの前より逃げし者は、五万八千人なりき。茲に於いて彼等イスラエルと講和し、之に仕えたり。これよりシリア人は恐れて、最早アンモンの裔等に援助を與えざりき。

第十一章

ダヴィド、ベトサベーと姦通罪を犯し、之を隱す途なきにより、その夫ウリアを殺さしめ、後彼女と結婚す。

一 一年立ち歸りて、1) 王等戰爭に出ずる時のことなりき、ダヴィド、ヨアブに己が僕及び全イスラエルを率いしめて遣しけるに、彼等アンモンの裔等を掠め、ラッバ2) を圍みぬ。されどダヴィドはイエルサレムに留りたり。3)

第十一章　1) アンモン人との戰爭の二年目の初め。ダヴィドの勢力が最も盛であつた時。　2) ラッバは「大都」という字義で首府であつたヤボク河の一支流のほとりに建てられ、要害の地にあつた。今日でもそこには壯麗な廢墟が見られる。　3) 代上二〇・一—3)。

二　さる程に、ダヴィド午過ぎてその床より起き出で、王の家の屋根の上を歩みたることありしが、4) その家の屋根より、向かいの方に沐浴を洗う女を見たり。その

三　女は甚だ美しかりき。三 王乃ち人を遣して、その女の誰なるかを問わしめけるに、そはエリアムの娘にしてヘト人ウリア5) の妻なること、彼に報ぜられたり。

四　茲に於いてダヴィド使者を遣し、かの女を取り、6) その己が許に入りて後之と共に臥しけるが、女直にその身を潔めてその穢れを去り、7) 五 その家に帰りたれど、懷胎したり。より女は人を遣し、ダヴィドに告げて

六　「我、懷胎せり。」と云えり。六 ダヴィド乃ちヨアブの許に人を遣し、「ヘト人ウリアをわが許に遣せ。」と云いしかば、ヨアブ、ウリアをダヴィドの許に遣したり。

4) ダヴィドは暑い盛りの眞晝時を臥床して過し、夕刻涼しくなつてからその家の平屋根の上に出たのである

5) ウリアはヘト人で、イスラエル人ではないが、イスラエルの天主を尊崇していたにアブラハムの時代からパレスチナにいた（創一五・二〇。二三・五以下）。彼らは後に至つてなおカナアンの諸民族中に数えられている。（出三・八。申七・一。書三・一〇など）。キリスト御降生前千五百年頃、彼らは小アジアに強力な一帝國を形成した。首都はアンゴラの西にあるカッテイ――今日のボグハズケイ――であつた。―6) ベトサベーは王の許への招待を辭退することができなかつた。―7) 利一五・一八參照。

七 かくてウリア、ダヴィドの許に至るや、ダヴィド、ヨアブ及び民に何の
八 恙もなきか、交戰の模樣如何なるかを彼に問いぬ。やがてダヴィド、ウ
リアに云いけるは、「汝の家に行きて、汝の足を洗え。」と。[8] ウリア乃ち
九 王の家を出でしが、王よりの馳走その後に續きたり。然るにウリアは、
その主君の他の僕等と共に、王の家の門前に眠りて、己が家には下らざり
き。一〇人ダヴィドに告げて、「ウリアはその家に行かざりき。」と云いしか
一〇 ば、ダヴィド、ウリアに云いけるは、「汝は旅路より戻りしに非ずや。何
一一 故に汝の家に下らざる。」と。一一ウリア、ダヴィドに云いけるは、「天主の
櫃、及びイスラエルとユダとは、天幕に住し、[9] わが主人ヨアブと、わが
主人の僕等とは地の表に留まれるに、我豈わが家に入りて飲食し、わが妻
一三 と共に眠るべけんや。我、汝の幸と汝の靈の幸とにかけて誓つてかかる事
をせじ。」と。一三ダヴィド乃ちウリアに云いけるは、「今日も亦此處に留ま
れ。我、明日汝を遣り返さん。」と。ウリアその日と次の日と、イエルサ

8) 疲勞を癒すために。ダヴィドはウリアを生れるべき子の父と見せようとするつもりなのである。

9) 契約の櫃は母上四・五にある通り、陣中に持參していた。

一三 レムに留まりしに、一三ダヴィド彼を召して、己が前に飲食せしめ、之を醉
わしめたれば、彼宵に出でて、その主君の僕等と共にその床に眠り、己が
一四 家には下らざりき。一四朝に至りて、ダヴィド、ヨアブに書簡を認め、ウリ
一五 アの手より之を遣りぬ。一五書簡に記して曰く、「ウリアを戰鬪の前線の、
軍の最も激しき處に置き、彼を捨て去れ、これ彼をして討死せしめんため
一六 なり。」と。10) 一六茲に於いてヨアブ、邑を圍むや、その最も剛勇なる人々の
一七 在りと知れる處に、ウリアを置きたり。一七やがて市の人々出でてヨアブと
戰いしが、ダヴィドの僕の民の中にも殪るる者あり、ヘト人ウリアも亦死
一八 せり。一八ヨアブ乃ち人を遣し、戰爭の事を悉くダヴィドに告げしめ、
一九 一九なお使者に命じて云いけるは、「汝、戰爭の事を悉く王に告げたる時、
二〇 二〇王もし怒りて、〝汝等何故石垣に近づきて戰いしぞ。石垣よりは、上よ
二一 り數多の矢を放たるるを汝等知らざりしか。二一イエロバール11) の子アビメ
レクを殺したるは誰ぞ。女、石垣より挽磨の片方を彼に投げて、テベスに

10) ダヴィドは自分の犯罪を秘しておく最初の計畫が旨くゆかなかつたので、かくも自分に忠義な少しも罪のない人を、討死させるような措置を取つた。

11) 士師ゲデオンの別名。

之を殺したるに非ずや。汝等何故石垣の傍に近づきたるか。〃と云うを見ば、汝云うべし、〃汝の僕、ヘト人ウリアも亦殺されたり。〃と。」12)

二二 二三 使者乃ち出發ち、來りてダヴィドに、ヨアブの已に命じたる事を悉く告げぬ。二三 しかして使者ダヴィドに云いけるは、「かの人々我等に對して優勢なりしが、畑に出でて我等の許に至りしかば、我等激しく鬪い、之を追いて市の門にまで達したり。二四 折しも射手の者共、石垣の上より汝の僕等を射しかば、王の僕等の中に死する者あり、汝の僕ヘト人ウリアも亦死せり。」と。二五 ダヴィド使者に云いけるは、「汝ヨアブにかく云うべし、〃汝この事に落膽するなかれ。蓋し、戰爭の歸趨は定め難くして、時に此方、時に彼方の双に殪るることあり。されば汝の兵士の勇氣を鼓舞して邑を攻め、彼等を激勵して之を滅ぼすべし。〃と。」二六 さてウリアの妻は、その夫ウリアの死したるを聞きて之が爲に嘆きぬ。13)

二七 その喪果つるに及び、ダヴィド人を遣して、之をその家に連れ來らしし

12) あなたはウリアが殺されるよう、そうすることを私に命じただから勇士達戰死の悲報をも、あなたは聞かねばならぬ。士九・五三。

13) 服喪の期間は普通七日（母上三一・一三。）ベトサベーがわが夫の死の責任がダヴィドにあることを知つていたか否かは不明。

めたり。かくて彼女その妻となり、之に一子を産みぬ。されどダヴィドが爲したるこの事は、主の御前に嘉せられざりき。14)

第十二章

ナタンの譬話—ダヴィド己が罪を告白して赦さる—その子の死—サロモンの誕生—ラバトの攻略。

一 茲に於いて主ダヴィドの許に、ナタンを遣し給えり。1)
二 彼その許に至りて之に云いけるは、「一つの市に二人の人あり、一人は富み、一人は貧しかりき。
三 その富める者には、羊及び牛も甚だ多かりしが、貧しき者には、その購い養てたる小さき牝羊一頭の外、何もあらざりき。そは彼の家にその子女と共に生い立ち、彼のパンを食い、その椀より飲み、彼の懷に眠りて、彼にとりさながら娘の如くな

14) この話は終始深い道德的嚴肅さを帶びている。結びの一節中にはダヴィドの行爲に對する明確な非難が含まれている。

第十二章 1) ダヴィドは自分の二重の非行を少しも痛悔する色なく（二七節參照、一年間罪の生活を送つた。預言者ナタンはまず貧者の小さき羊の譬話で彼の目を開こうとする。

四　りき。四さてその富者の許に、一人の旅人來りしに、彼、己が羊及び牛の中より取りて、己が許に來れるその旅人の爲に饗宴を設くるを吝み、かの貧者の牝羊を取りて、己が許に來れるその人の爲に調理せり。」と。五時にダヴィド、その人に

五　對し太く怒りて、ナタンに云いけるは、「主活き給う、之を爲したる人は、死の子なり。[2]六彼はその牡羊を、四倍にして

六　返すべし、そは彼、かくの如き事をなして、憐まざりし故なり。」と。[3]七ナタン、ダヴィドに云いけるは、「汝こそその

七　人なれ。[4]主イスラエルの天主はかくぞ曰う、〃我、注油して汝をイスラエルの王となし、また汝をサウルの手より救い

八　出し、八汝の主[5]の家を汝に、汝の主の妻等[6]を汝の懷に與え、なおイスラエルとユダとの家を汝に與えたり。是等の

九　事もし小ならば、我更に大なる事を多く加えん。九然るを汝、

[2]すなわち死すべき者なりとの意。ダヴィドは巧みに仕組まれた譬話を實際の出來事と思い、われとわが身に宣告を下しているとは夢にも知らず、有罪者に死刑を申し渡し、償いの規定（出二一・三七）が被害者に有利に適用されることを望んだ。—[3]出二二・一。[4]この譬話を選んだのは寔に賢明、何となればダヴィドの天職は法と正義とを行うにあつたから。八・一五参照。—[5]サウル。—[6]小アジアの習慣によれば王の妻妾達はその後繼者に讓られた。

何故主の御言を輕んじて、わが眼前に惡を爲したるぞ。汝は劍もてヘト人ウリアを討ち取り、その妻を納れて汝の妻とせり。即ちアンモンの裔等の劍もて、彼を殺したるなり。一〇さればその劍は永久に汝の家を離れじ。7) 蓋は汝、我を輕んじて、ヘト人ウリアの妻を取り、汝の妻となしたればなり。〃　一一よりて主、かくぞ曰う、〃視よ、我、汝に對し汝の家より災厄を起さん。8) 即ち我汝の眼前にて汝の妻等を取り、汝の近き者に與えん。かくて彼は、この陽の目を見つつ、汝の妻等と共に臥さん。9) 一二實に汝は密かに爲したり、されど我はすべてのイスラエルの眼前及び陽の眼前に此事を爲さん。〃　一三ダヴィド、ナタンに對し罪を犯せり。10)」と云いしに、ナタン、ダヴィドに「我主に

7) 當時生きていた一家の者から離れまい。永久とはその家の存續する間。
8) されば夕マルが辱しめられ、アムノンとアドニアとが殺され、アブサロムが叛いて死に、姦淫中にできた愛子が死んだなどの不幸は、彼のベトサベー又はウリアに對する行爲の罰であつた。―9) 本一六・二二参照。
10) 私はウリアやベトサベーに對してまた惡い手本を示したので人民に對しても、罪を犯した。しかし天主に對して最も重罪を犯した。それはいわば彼が五節で自分に下した死刑の宣告に默つて服したようなもので、この時からダヴィドは以下及び詩篇五〇などにある如く、いろいろ償いをして自分の罪を痛悔した。

一四 云いけるは、「主も亦汝の罪を除き給いぬ。汝は死せじ。[11] 一四 されど汝はこの事の爲に、主の敵をして冒瀆せしめたれば、汝に生れたるその子は必ず死すべし。」と。 一五 かくてナタンはその家に歸りぬ。やがて主、ウリアの妻がダヴィドに産みたる子を擊ち給い、望み絶えたり。 一六 ダヴィドその兒の爲に主に願い

一七 ぬ、即ちダヴィド斷食し、獨り入りて地上に伏しぬ。 一七 時にその家の長老等、[12] 來りて彼を强いて地より起たしめんとしたるが、彼肯んぜず、また彼等と共に

一八 食物を攝らざりき。 一八 さてその幼兒は七日目に死するに至りぬ。されどダヴィドの僕等は、その兒の死せる由を、ダヴィドに告ぐるを恐れたり。即ち云いけるは、「視よ、兒のなお生ける時、我等彼に語りたれども、彼、我等の聲に耳を傾けんとせざりき。まして我等その兒の死せる由を告げなば、彼如何ばかり

一九 惱まんや。」と。 一九 然るにダヴィド、その僕等の囁けるを見るや、幼兒の死せるを悟り、その僕等に云いけるは、「子死したりや。」と。 彼等「死したり。」

二〇 と彼に答えぬ。 二〇 茲に於いてダヴィド、地より起ち上り、身を洗いて油を塗り

11) 集四七・一三。
12) 最も古參で親しい召使達

衣服を更うるや、主の家に入りて拜せり。次いで彼、己が家に至り、求めて己が爲にパンを出さしめて食せり。三然るにその僕等彼に云いけるは、「汝の爲し給える所は何事ぞや。汝、子のなお生ける時には、その爲に斷食して泣き給いしに、子の死するや、起ちてパンを食し給うとは。」と。三彼云いけるは、「幼兒のなお生ける間は、我之が爲に斷食して泣きぬ。蓋は我、主の彼を我に賜わざることありや否や、幼兒生存らうるを得るや否や、誰か知らん、と謂いたればなり。三三されど今は彼死したれば、我何の故にか斷食すべき。我豈彼を再び呼び返すを得んや。寧ろ我こそ彼の許に行くべけれ、されど彼はわが許に歸らざるべし。」と。二四ダヴィド、次いでその妻ベトサベーを慰め、その許に入りて之と共に臥しぬ。彼女子を産みしかば、彼その名をサロモンと稱べり。二五然るに主之を愛し、二五預言者ナタンの手に託して、その名を「主の愛子」[13]と稱ばしめ給いぬ。主之を愛し給いしに由りてなり。二六時にヨアブは、アンモンの裔等のラバトを攻めて、王都を襲いたり。[14] 二七ヨアブ、ダヴィドの許に使者

13) 故にサロモンの名は二つイエデイディアー（天主の愛子）及びサロモン（平和の君）。

14) 代上二〇・一。

を遣して云わしめけるは、「我ラバトを攻めて、まさに水の邑を取らんとす。二八されば汝今、残餘の民を糾合し、その市を圍みて之を取り給え。是、我がその邑を荒したらん時、勝利のわが名に歸せらるることなからんが爲なり。」と。二九茲に於いてダヴィド、民を悉く集め、ラバトに向いて進擊し、鬪いて後之を取りぬ。三〇しかして彼、彼等の王の冠をその頭より取りしが、そは重量一タレントの黄金にして、いと貴き寶石を鏤めたり。15) 之をダヴィドの頭に置きぬ。なお其市の鹵獲品は甚だ多かり。三一彼またその民をも引出して、鋸引にし、しが彼之を持ち去りたり。三二彼また鐵を被せたる戰車もて之を轢き、刀もて斬り刻み、また煉瓦を燒く窯の中を通らしめたり。16) 彼、アンモンの裔等のすべての市に對して斯くなしぬ。かくてダヴィド、全軍を率いてイェルサレムに歸還せり。

15) 價値は寶石によつて左右される。―16) ヘブレオ語の原文は、今では普通、ラテン語譯にあるようなかかる殘虐な刑でなく、アンモン人に申し渡された苦役强制勞働の意に解されている。

第十三章

アムノン、タマルを犯す―故にアブサロム彼を殺してゲッスルに逃走す。

一　さてこの後、ダヴィドの子アムノン、ダヴィドの子アブサロムの眉目
二　卓れて美しき妹に戀することありしが、その名はタマルと云えり。1) 三　彼
之を好むこと甚だしく、之を戀うるあまり病み患いぬ。そは處女なる故
三　に、彼之には些かも淫奔事を爲し難しと思いたればなり。2) 四　然るにアム
ノンに一人の友あり、名をヨナダブと云いて、ダヴィドの兄弟セマーの
四　子なりしが、3) 甚だ賢き人なりき。四　彼、アムノンに云いけるは、「王の
五　子よ、汝何故日增に瘠せ行くや。何ぞ我に告げざる。」アムノン彼に云
五　いけるは、「我はわが兄弟アブサロムの妹タマルに戀せり。」五　ヨナダブ
六　之に答えけるは、「汝の床の上に臥して病を裝い、汝の父來りて汝を見
六　舞わん時、之に云え、〃乞う、わが妹タマルをして、わが許に來り、我
六　に食を與え、物を調理して我にその手より食せしめよ。〃と。」六　アムノ

第十三章　1) アムノンはアキノアムから、アブサロムとタマルとはマーカからヘブロンで生まれたダヴィドの子等。―2) 未婚の處女は脇から男が殆んど近寄れぬほど、全く交際が嚴禁されていた。3) 母上一六・九參照。

ン乃ち臥して病める如く裝い始め、王の彼を見舞に來りし時、アムノン王に云いけるは、「願わくは、わが妹タマルをして、來りて、わが眼前にて二品を造らしめ、4) 以て我にその手より受けて食するを得しめ給え。」と。七 ダヴィド、家にあるタマルの許に人を遣して云わしめけるは、「汝の兄アムノンの家に來り、5) 彼が爲に食物を調理れよ。」と。八 タマル乃ちその兄アムノンの家に至りしに、彼臥しおれり。彼女粉を取りて捏ね、之を薄めてその眼前にて食品を調理せり。九 しかしてその調理せる物を取り、注ぎ出して彼の前に置きしが、彼食するを欲せざりき。即ちアムノン云いけるは、「わが許より皆を出だせ。」と。一〇 かくて皆出ずるに及び、一〇 アムノン、タマルに云いけるは、「食物を閨の中に持ち來り、我に汝の手より食せしめよ。」と。よりてタマル、已が造りたる食品を取りて、閨の中なるその兄アムノンの許に持ち來れり。一二 かくて彼に食物を差出したる時、彼、彼女を捕えて云いけるは、「わが妹よ、いざ我と共に臥せよ。」と。一三 タマル彼に答えけるは、「否、わが兄よ、我を犯

4) 菓子の一種であつたらしい。

5) 故に王子たちは別々に邸を有していた

すなかれ、蓋しかかる事はイスラエルにて行うべからず、[6] 汝この
一三 愚かなる事[7]を爲すなかれ。一三 寔に我はわが恥辱に堪うる能わず、
また汝はイスラエルの愚者の一人の如くになるべし。寧ろ王に語れ
一四 さらば彼は汝に我を拒まざらん。」と。[8] 一四 されど彼はその請願を容
一五 れずして、力の優れるままに彼女を壓倒して之と共に臥しぬ。一五 や
がてアムノン彼女を甚だ深く憎み嫌うに至れり。その彼女を憎める
憎悪は、前に之を愛したりし愛よりも大なる程なりき。アムノン乃
一六 ち云いけるは、「起ちて行け。」と。一六 彼女之に答えけるは、「汝が
今我を追い出して我に爲すこの惡は、汝が前に爲したる惡よりも大
一七 なり。[9]」と。されど彼、之を聽容れんともせず、一七 己に仕うる僕を
呼びて云いけるは、「之をわが許より追い出して、その後に戸を鎖
一八 せ。」と。一八 彼女は長き衣を着しいたり。即ちかくの如き衣は處女
なる王女等が用うる慣なりしなり。[10]
かくてその僕、彼女を追い出

6) 利一八・九、一一参照。アムノンの非行は利二〇・一七にある死刑に該當した
7) 天主をなみする所行。―8) 結局彼女は彼と結婚するつもり
9) 實際タマルが前に受けた凌辱は隱せば隱せたであろうが、この放逐は町中に知れ渡つた。―10) ヤコブがその愛子に着せた上衣のような、裾は足まで、袖は手までに達する長い衣服

一九　してその後に戸を鎖したり。一九彼女はその頭に灰を振りかけ、長き衣を裂き、その頭に手を載せて、叫びつつ歩み行けり。11)

二〇　二〇然るにその兄アブサロム彼女に云いけるは、12)「汝の兄アムノン、汝と共に臥ししにあらずや。されど妹よ、今は默せかし、彼は汝の兄なり。またこの事の爲に汝の心を惱ますなかれ。」と。

二一　かくてタマルはその兄アブサロムの家に、悲しみに悴れつつ留まれり。二二さて、ダヴィド王是等の事を聞くや、太く悲しみしが、その子アムノンの心を悲しましむるを欲まざりき。そは長子なるに由りて、彼之を愛しいたればなり。13)

二三　二三なおアブサロムはアムノンに、惡しとも善しとも語らざりき。即ちアブサロムは、アムノンが己の妹タマルを犯したるに由りて、彼を憎みしなり。二四然るに二年の後、エフライムの邊なるバールハツルに於いて、アブサロムの羊の毛を剪りしことあり、アブサロムは王の子等を悉く招きぬ。14)

二四　二四彼、王の許に至りて之に云いけるは「視よ、汝の僕の羊の毛剪らる。請う、王その僕等と共に、僕の許に來

11) 昔の小アジアにおける悲嘆と屈辱との印。—12) タマルは眞直に彼の許へ身を寄せに行つたに相違ない。

13) ダヴィドは自分の罪を思い、それで死刑に行わなかつたのであろう。—14) 羊毛を剪る際には祭が行われた

二五 り給え。」と。二五王アブサロムに云いけるは、「否、わが子よ、我等の皆至らんことを求めて、汝の負擔を重からしむるなかれ。」と。彼なおも王に強いたれど、王行くを肯ぜずして彼を祝しぬ。16)

二六 二六アブサロム云いけるは、「汝もし來るを欲し給わずば、願わくは、せめてわが兄アムノンを我等と共に來らしめ給え。」王彼に云いけるは、「彼の汝と共に行くこと、更にその要なし。」

二七 二七されどアブサロム彼に強いたれば、彼之と共にアムノン及び王の子等を悉く行かしめたり。

二八 アブサロム乃ち恰も王の饗宴の如き饗宴を設けぬ。二八さてアブサロム、その僕等に命じて云いけるは、「アムノンが酩酊し、我が汝等に〝彼を擊て。〟と云わん時を窺い、彼を殺せ。恐るるなかれ。汝等に命ずるは我なればなり。勇を鼓して雄々しき人たれ。」と。

二九 二九よりてアブサロムの僕等、アブサロムの彼等に命じたる如くアムノンに爲せり。されば王の子等皆起ちて各々その騾馬に乘り、16)逃げ去りたり。

三〇 三〇かくて彼等なお道にありし時、噂ダ

15) 父としての希望を伴う別れの言葉。―16) 騾馬を異種交配によつて作り飼うことは律法で禁じられていたが、騾馬は驢馬より荷物運搬用騎乘用として優れているので、外から輸入されていた。但しこれは貴人だけが用いた。本一八・九。王上一・三三参照。

三一 ヴィドの許に至りぬ、曰く、「アブサロムは王の子等を悉く殺したり。その一人だに生き残れるはあらず。」と。三二 王乃ち起ちてその衣服を裂き、地上に倒れ伏したり。又彼に侍せるその僕等も皆、己が衣を裂けり。三三 されどダヴィドの兄弟セマーの子ヨナダブ答えて云いけるは、「わが主君王は王子等皆殺されたりと想い給うなかれ。死したるはアムノンのみ。蓋し彼はアブサロムの妹タマルを犯せし日より、アブサロムの口によりて定められたるなり。三四 されば王子等皆殺されたり〃と曰うなかれが主君王は、この事をその心にかけて、〃王子等皆殺されたり〃と曰うなかれ。三五 さる程にアブサロムは逃亡せた死したるはアムノンのみなればなり。」と。三六 その語り終えし時、王子等現れけるが、彼等入り。時に見張の若者その眼を擧げて望みしに、視よ、山の脇より間道傳いに多くの人々來れり。三七 ヨナダブ王に云いけるは、「視よ、王子等來れり、汝の僕の云える如くなりぬ。」と。三八 さてアブサロムは逃げて、ゲッスルの王アミウドの子トルマイ17)の許に

17) トルマイはアブサロムとタマルとの母方の祖父（代上三・二）。

三八 行けり。ダヴィドは日毎その子を悼みぬ。三八アブサロムは
三九 逃れてゲッスルに至りし後、三年の間彼處に居れり。三九ダ
ヴィド王はアブサロムを追うことを止めたり、18) そはアム
ノンの死に對し、悲哀癒えたればなり。

第十四章

ヨアブ、アブサロムの歸還を求む—アブサロム王の御前に伺候す。

一 然るにサルヴィアの子ヨアブ、王の心のアブサロムに向
二 かえるを知り、二テクアに人を遣し、彼處より賢き女を連
れ來らしめて、之に云いけるは、1)「汝、喪を裝い、喪服を
三 着、油を塗らずして、既に時久しく死者の爲に悲しめる女
の如くなれ。三しかして王の許に入り、彼にかくの如き言
四 を語るべし。」と。かくてヨアブその言を彼女の口に授け
たり。四テクアの女乃ち王の許に入るや、その前にて地

1) 先には彼を自分の掌中に握ろうとしていたが。

第十四章 1) テクアはベトレヘムの南方、ユダの山地にある町で、預言者アモスの郷里であつた（廢一・一）。ヨアブは王の意表に出るつもりで、アブサロムのため執成しをさせるのに、見ず知らずの女を使つた。彼は前に最早自分で試みて、徒勞に終つたのらしい。

五　上に平伏し、敬禮して云いけるは、「王よ、我を救い給え。」五王彼女に云いけるは、「何事ぞ。」女答えけるは、「哀しくも、我は寡婦なり、即ちわが夫死せり。六汝の婢に、二人の子ありしが、彼等互に畑にて爭いしに、誰も之を引分くる者あらざりしかば、一人は他を擊ちて之を殺しぬ。七然るに視よ、親戚全て起ちて汝の婢を責め、云いけるは、〃己が兄弟を擊ち殺したる者を付せ、我等その殺したる兄弟の生命の爲に之を殺し、世嗣を滅ぼさん。〃と。かくて僅かに殘れるわが火花を消し、地上にわが夫の名をも後胤をも留めざらんとす。」八王、女に云いけるは、「汝の家に行け、我汝の爲に命を下さん。」九テクアの女、王に云いけるは、「わが主君王よ、この不義は我とわが父の家とにこそあれ、2)されど王とその御座とには罪なかれかし。」一〇王云いけるは、「誰か汝に反對する者あらば、之をわが許に連れ來れ。さらば彼最早汝に觸るることなかるべし。」一一女云いけるは、「願わくは王、主その天主を憶いて、復讐する近き血族の增すことなく、且そのわが子を殺すことなからしめ給え。」彼云いけるは

2) この流血行爲を償わぬのが不當であるというなら、私がその責を負うて天主の御前に責任を取りましょう

一二　「主活き給う、汝の子の毛髪一筋だも地に落つることあらじ。」一三時に女云いけるは、「汝の婢をして、一言わが主君王に語らしめ給え。」彼云いける

一三　「語れ。」一三女云いけるは、「汝何故に天主の民に對してかくの如き事を思い給いしぞ。また王何故にかゝる言を語りて罪を犯し、その追放し給える者を連れ

一四　歸り給わざるか。一四我等は皆死す。我等は再歸らざる水の如く地に溢れ落つ。

一五　されど天主は靈魂の滅ぶるを欲み給わず、棄てられたる者をして全くは滅ぶることとなからしめんと思いて、呼び戻し給う。[3] 一五されば我今、民の居る所にて

一六　わが主君王にこの言を語らんとて來れり。即ち汝の婢は云いぬ、〃我、王に語らん。王、或はその婢の言う所を行い給うこともやあらん。〃と。一六しかして

一七　王は、天主の嗣産[4]の中より我とわが子とを共に滅ぼし去らんとするすべての人の手より、婢を救い出すことを聽き容れ給えり。一七されば汝の婢をして云わしめ給え、わが主君王の御言は犧牲の如く行われよかしと。[5] 實にわが主君王は天主の使の如くにして、祝福にも呪詛にも動かされ給わず。この故に主汝の

3) 結一八・三二。三三・一一。
4) 聖なる御民申三二・九。母上二六・一九参照
5) 信用できる言葉。

一八　天主汝と共に在す。」と。[6]　一八時に王答えて女に云いけるは、「わが汝に問う事を、我に隠すなかれ。」女彼に云いけるは、「わが主君王よ、語り給え。」

一九　王云いけるは、「この一切の事に於いては、ヨアブの手汝と共にあるに非ずや。」[7]　女、答えて云いけるは、「わが主君王よ、汝の靈魂の救いにかけて、凡てわが主君王の語り給えるこの事には、左にも右にも外れし所あらず。寔に汝の僕ヨアブこそ我に命じ、是等の言を悉く汝の婢の口に授けたるなれ。二〇即ち、その話し方を変えんとして、汝の下僕ヨアブは、我にかく命じたるなり。されどわが主君王よ、汝は天主の使に智慧ある如く賢くして地上一切の事を悟り給う。」二一茲に於いて王ヨアブに云いけるは、「視よ、我怒を鎮めて、彼の云う所を爲さん。されば行きて若者アブサロムを呼び戻せかし。」と。二二時にヨアブ地に平伏し、敬禮して王を祝せり。[8]　しかしてヨアブ云いけるは、「わが主君王よ、今日汝の僕、わが汝の眼前に恩惠を得たることを悟れり、蓋は汝、その僕の云える所を行い給いたればなり。」と。

6) 母上二九・九。
7) この言からヨアブが前に最早アブサロムを王宮に召還するよう願い出たが徒勞に終つたことがわかる。
8) 王に感謝した。

二三　二三それよりヨアブ起ちてゲッスルに行き、アブサロムをイエルサレムに連れ來れり。二四然るに王云いけるは、「彼はその家に歸るべし。彼をしてわが顏を見しむるなかれ。」と。されば アブサロムはその家に歸りて、王の顏を見ざりき。9)

二五　二五因みにアブサロムの如く美麗に、いと優雅なる人は全イスラエルにあらず、彼には足の裏より頭の頂まで、玷些かもなかりき。

二六　二六彼は（その髪煩わしかりければ、年に一度刈りしが、）その頭を刈りし時、公定の衡にてその頭髪をはかりしに、二百シクルありき。10)

二七　二七さてアブサロムには三人の息子と、名をタマルと云う、姿美わしき一人の娘と生れたり。11)

二八　二八アブサロムはイエルサレムに留まること二年なりしが、王の顏を見ざりき。

二九　二九よりてヨアブの許に人を遣りて、之を王の許に遣さんとしたれど、彼その許に來るを肯ぜず、再び人を遣りしが、彼なおその許に來るを肯ぜざりしかば、

三〇　三〇アブサロムその僕等に云いけるは、「ヨアブの畑がわが畑の傍にありて、大麥の刈入あることは、汝等の知る所なり。さ

9) アブサロムの歸つたことは、その惡意のために、惡虐無道の行爲をする契機となつた。

10) 黃金二百シクルほどの價値があつた。

11) この息子達はいずれも年若くして死んだ。（一八・一八參照）

れば行きて之に火を放て。」と。アブサロムの僕等乃ち穀物に火を放てり。ヨアブの僕等その衣服を裂き、來りて云いけるは、「アブサロムの僕等、畑の一部に火を放てり。」

三一 と。三 茲に於いてヨアブ起ちて、アブサロムの許に至り、その家に入りて云いけるは、

三二 「汝の僕等は何故にわが穀物に火を放ちしぞ。」と。三 アブサロム、ヨアブに答えける

は、「我汝の許に人を遣りて、わが許に來らんことを汝に請いしが、是我が汝を王の許

に遣して、之に〃我何が爲にゲッスルより來りしぞ。我にとりては彼處にあるこそ優り

たれ。〃と云わしめん爲なりき。されば請う、我をして王の顏を見るを得しめよ。彼も

三三 しわが罪を忘れずば、我を殺せかし。」と。三 ヨアブ乃ち王の許に入りて之に一切を告

げぬ。やがてアブサロム召されて王の許に入り、その前に地に平伏して敬禮したるに、

王アブサロムに接吻せり。

第十五章

アブサロムの政策と陰謀—ダヴィド餘儀なく逃ぐ。

一 かくてこの後アブサロムは、己が爲に戰車、騎兵、及びその前驅たる人々五十人を設

二　けたり。1) しかしてアブサロム、朝に起きて門2)の入口の邊に立ち、人事ありて王の審判に來る時は、アブサロム之を皆わが許に召びて、「汝はいずれの市の者なるか。」と云い、その者答えて、

三　「汝の僕、我はイスラエルの或族の者なり。」と云うや、三アブサロム之に答えけらく、「汝の言は我に善く正しく見ゆ。されど汝に聽く者誰も王より立てられず。」と。

四　また四「我を立ててこの地の士師となすは誰ぞや、さらば事ある者皆我に來り、我正しく審判かんものを。」と。五更に又、人彼に近寄りて挨拶する時は、彼その手を伸べてその人を執え、之に接吻したり。六彼は凡そ審判に來りて王の上聞に達せんとするイスラエルにはかく爲して、イスラエルの人々の心を收攬せり。3) 七かくて四十年4)の後、アブサロム、ダヴィド王に云いけるは、「我をして行きて、我がヘブロンに於いて主に立てたる願を還さしめ給え。5)

第十五章　1) 王の威儀を保つための供奉の人々に擬したのであろう　2) 王宮の門。―3) 王に對する不滿の種を播いたのである。―4) ダヴィドの治世は四十年以上ではなかつたから、これは明らかに謬れる年數。ヨゼフス・フラヴィウスやシリア語やアラビア語の書には、四年と記してあるが、そうかも知れぬ。　5) 聖殿建立前は犧祭執行はイエルサレムに限られていなかつた。ヘブロンは當時ユダの第

八　蓋は汝の僕、シリアのゲッスルに在りし時、願を立てて〃主もし我をイエルサレムに連れ戻し給わば、我主に犠牲を献げん。〃と云いたればなり。」と。九ダヴィド王彼に「安らかに行け」と云いしかば、彼起ちてヘブロンに行きぬ。一〇しかしてアブサロム探偵の者をイスラエルの諸族に遣し、云わしめけるは、「汝等喇叭の音を聞かば、直に云え、〃アブサロム、ヘブロンにて王となれり。〃と。」一一さてイエルサレムよりは二百人、[6]召されてアブサロムと共に行きしが、彼等は心素直に従い行きたるのみにて、些かもその理由を知らざりき。一二またアブサロムは、ダヴィドの顧問官、ギロ人アキトフェルを、その市ギロより呼び迎えたり。かくて彼、犠牲を屠り捧げし時、強固なる陰謀成りて、民益々アブサロムの許に馳せ集まりぬ。一三時に使者ダヴィドの許に至りて、「イスラエル擧りて心を盡しアブサロムに従う。」と云えり。一四ダヴィド、己と共にイエルサレムに在るその僕等に云いけるは、「起て、我等逃げん。[7]

二の首都であった。[6]―アブサロムが王の命令で君主であると布告された如く見せかけるための有力家達であったらしい。

[7]ダヴィドは盲目的に怖れて逃げるのではない彼は市中にも謀叛が起つたのでその都市を保持できないことをよく知つていたのである。

蓋し、我等アブサロムの面前より遁るるを得ざるべし。急ぎ出でよ、恐らくは、彼來りて我等を襲い、我等に破滅を齎し、また劍の刃もて市を擊たん。」と。一五王の僕等彼に云いけるは、「凡て我等の主君たる王の命じ給う所は、何にても汝の僕なる我等快く之を果さん。」と。一六茲に於いて王とその全家、徒歩にて出で行きしが、王その妾なる女十人を殘して、家を守らしめたり。8) 一七かく王ならびにイスラエル人一同徒歩にて出で行き、家より遠く離れて立てり。9) 一八彼の僕等は皆その傍にありて歩み、ケレト人とフェレト人との部隊、及びゲトより彼に從い來りしゲト人の勇士六百人は、皆徒歩にて王の前に立ちて進みぬ。10) 一九時に王ゲト人エタイに云いけるは、「汝何故に我等と共に來るや。歸りて王11)と共に住まれ。蓋は汝は異國人にして、已が處より出で來りたればなり。二〇汝、來りしは昨日なるに、爭で今日强いて我等と共に行く要あらんや。但我はわが行くべき處に行く。汝は戻りて汝の兄弟をも共に連れ歸れ。主汝に御憐憫と眞實とを

8) かような混亂の際には女達を安全な場所に連れてゆくことは容易でないから。
9) 一番はずれの家からイエリコの方へ。
10) 本八・一八。
11) 今は事實上王であるアブサロム。

二一　示し給わん、其は汝、好意と信實とを示したればなり。」と。　二二　エタイ、王に答えて云いけるは、「主は活き給う、またわが主君王は活き給う、わが主君王よ、死にもあれ、生にもあれ、凡て汝の在す處には汝の僕も亦在らん。」と。　二三　ダヴィド、エタイに「いざ進め。」と云いしかば、ゲト人エタイ進み行き、彼と共にあるすべての人々、及び殘餘の民衆も然せり。　二三　彼等皆聲高く泣き、民皆進みぬ。王も亦セドロン川を渡り、民皆荒野を望む道に向かいて進めり。　二四　司祭サドク、及び彼と共なるすべてのレヴィ人も亦、天主の契約の櫃を擔いて來り、天主の櫃を据えたり。アビアタルは上りて、12)　市より出でたる民の皆渡り終わるを待ちぬ。　二五　時に王サドクに云いけるは、「天主の櫃を邑に舁き戻れ。我もし主の御眼前に恩寵を得ば、彼は我を連れ歸りて之とその幕屋とを我に示し給わん。13)　二六　されど彼もし我に、〝我汝を嘉せず。〟と曰わば、我覺悟せり。その御前に善なる事を爲し給え。」と。14)

12) 橄欖山に登つて
13) ダヴィドは自分の退位が天主の御旨によると信じ、全く己を御旨に任せた。そしてただそれが御旨である場合にのみ、王都に歸り再び天主の聖所に入りたいと思つた。（詩四二参照）。棄てられた後のサウルと比べて、いかに相違していることか！
14) ダヴィドは最初からアブサロムの謀叛を、ナタンの

二七　二七王また司祭サドクに云いけるは、「ああ洞見者よ、安らかに市に歸れ。
しかして汝等の二人の子、卽ち汝の子アキマースとアビアタルの子ヨナ
二八　タスとも汝等と共にあれ。二八視よ、我は汝等より我に知らする言の來る
二九　まで、荒地の平野15)に隱れおらん。」と。二九茲に於いてサドク及びアビ
三〇　アタル、天主の櫃をイエルサレムに昇き戻り、其處に留まれり。三〇さる
ほどにダヴィドは橄欖山を登りしが、登りながら泣き、跣足にて歩み、
その頭を覆いおれり。16)なおまた彼と共にある民も皆頭を覆い、泣きな
三一　から登り行けり。三一然るにアキトフェルも亦、アブサロムと共に隱謀に
加われる由、ダヴィドに傳えられたれば、ダヴィド云いけるは、「主よ、
三二　願わくは、アキトフェルの策謀を愚にし給わんことを。」と。三二かくて
ダヴィド、山の頂に上り、其處に於いて主を拜せんとしたるに、17)視よ、
アラク人クサイ、衣服を裂き、頭に土を被り、來りて彼を迎えたり。
三三　三三ダヴィド彼に云いけるは、「汝もし我と共に來らば、我に煩いとなら

言による（一二・一〇―一一）自分に課せられた償いの業と解していた。

15) ヨルダンの此方のイエリコのそばの。―16) 鬚のある顔の下部を哀悼の印に包んでいた。

17) 彼はそこから契約の櫃の安置してあるシオンの方をもう一度眺めることができた。

三四 ん。三四されど汝もし市に歸りて、アブサロムに、〃王よ、我は汝の僕なり、我は汝の父の僕たりし如く、汝の僕たらん。〃と云わば、アキトフェルの策謀を空しからしむべし。

三五 三五なお汝の許には、司祭サドク及びアビアタルあり、されば汝王の家より聞かん事は、

三六 何にても之を司祭サドク及びアビアタルに告ぐべし。三六また彼等の許にはその二人の子

三七 即ちサドクの子アキマースとアビアタルの子ヨナタスあり、故に汝等、その聞かん所を悉く彼等によりてわが許に云い遣るべし。」と。三七茲に於いて、ダヴィドの友クサイ、市に至りしが、アブサロムも亦、イェルサレムに入りたり。

第十六章

シバ、ダヴィドに食糧を携え來る—セメイ、ダヴィドを呪う—

アブサロム、イェルサレムに入る。

一 一さてダヴィド、少しく山の頂を過ぎたる時、ミフィボセトの僕シバ

二 パン二百箇、乾葡萄百房、無花果百菓、及び葡萄酒一嚢を負わせたる二頭の驢馬を引きて、彼を迎えに現れたり。1) 二王シバに「是等は何の

第十六章　1) 母上二五・一八にあるアビガイルのと同様、澤山な贈物。

三　爲ぞ。」と云いしに、シバ答えけるは、「驢馬は王の家族の乘らん爲、パンと無花果とは汝の僕等の食せん爲、また葡萄酒は人荒野にて疲れたる時飲まん爲なり。」と。[3] 王云いけるは、「汝の主人[2]の子は何處にありや。」シバ王に答えけるは、「彼は〃今日イスラエルの家、我にわが父の王國を返還さん。〃」と云いて、イェルサレムに留まれり。」

四　[3] 王シバに云いけるは、「ミフィボセトの所有たりしと。」

五　[4] 王云いけるは、「わが主君物は悉く汝の所有とせよ。」[4] シバ云いけるは、「王よ、請う、我をして汝の前に恩惠を得しめ給え。」

六　[5] 王次いでバフリムまで來りしに、[5] 視よ、彼處よりサウルの家の親戚一人出で來れり。名をセメイと稱び、ゲラの子なるが、出で來りて進みつつ呪い、[6] ダヴィド王及びダヴィドの僕等一同を目がけて石を投げたり。[7] 折しも民皆、軍

2) サウル。―3) 本一九・二七。
4) シバは既に本九章に出ている彼はダヴィドが歸還した場合、その好意を得ようとして、わが主君ミフィボセトを誹謗した。ミフィボセトは人民の寵兒アブサロムと共に、王として人心を得ることを思わなかつた。ダヴィドのミフィボセト處斷は早まりすぎたが、王がアブサロムの離反を經驗したばかりのことと、首肯できる。―5) バフリムはイェルサレムからイェリコに至る街道に臨んでいた。しかしその位置を正確に定めることは不可能である（三・一六參照）。
6) 王上二・八。―7) セメイがダヴィドに石を投げたのは、小ア

七　人皆、王の右側左側にありて歩めり。七即ちセメイ、王を呪いし時かく云いぬ、「出でよ、出でよ、血の人、ベリアルの人。

八　主はサウルの家のすべての血に對し、汝に報い給えり、汝、彼に代りてその王位を奪いたれば、即ち主は王位を汝の子アブサロムの手に與え給えり。視よ、汝血の人なるに由り、汝の不幸汝を苦しむ。」と。九時にサルヴィアの子アビサイ、8)王に云いけるは、「この死せる犬は何故わが主君王を呪うや。我行きて彼の首を斬らん。」一〇王云いけるは、「サルヴィアの子等よ、其は我と汝等とに何かある。彼を措きて呪わしめよ、蓋し主ダヴィドを呪わしめんと、彼に命じ給えるなれば、9)誰か敢て、〃彼何故に然なしたる。〃と云うを得んや。」と。一一王またアビサイ及び己が僕等一同に云いけるは、「視よ、わが腹より出でたるわが子、わが生命を求む。況てイエミニの子は如何にぞ

ジアの風習に從つて、逃げた王に對する輕蔑と嫌惡とをあらわすためであつた。王をその親衛兵や軍兵のいる前で敢然罵るとは、彼のダヴィドに對する憎惡は、隨分深いものであつたに相違ない。彼はダヴィドを王位僭奪者、サウル家の流血者と云つて責めた（四・一以下、二一・一以下）。

8) ヨアブのこの兄弟は烈しい氣性であつた。

9) 天主はセメイの罪のもとではなく、ダヴイドをその罪ゆえに罰する道具として彼を用い給うた。

一二　や。彼を措きて、主の命じ給えるままに呪わしめよ。一三或は主わが苦悩を顧み給いて、今日のこの呪詛に對し、我に善を報い給うこともやあらん。」と。

一三　かくてダヴィド及び之と共にあるその從者等、道を歩み行きしに、セメイ山の背の横を通り、彼に向いて進み、呪いつつ彼を目がけて石を投げ、土を飛ばしたり。10) 一四かくて王及び之と共にある民皆、到りし時疲れたれば、其處にて休養せり。一五さる程にアブサロム及びその民皆、イェルサレムに入りしが、アキトフェルも之と共なりき。11) 一六然るにダヴィドの友、アラク人クサイ、アブサロムの許に至りて之に云いけるは、「王よ、幸あれ、王よ、幸あれ。」一七アブサロム之に云いけるは、「是、汝のその友に對する好意なるか。汝何故に汝の友と共に行かざりしぞ。」一八クサイ、アブサロムに答えけるは、「斷じて然せず其は我、主及びこの民一同と、全イスラエルとの選びたる人のものにして、彼と共に留まるべければなり。一九なお又之に加うるに、我は誰にか仕うべき。王の子にぞ然すべきに非ずや。我は汝の父に從いし如く、汝に從わん。」二〇時に

10) 土を飛ばす は輕蔑のしるし。
11) 本一五・三七に返つて再説。

二一

アブサロム、アキトフェルに云いけるは、「我等の爲すべき事を策せよ。」と。12) 三アキトフェル、アブサロムに云いけるは、「汝の父の殘して家を守らしめたる妾等の許に入れ。さらばイスラエル皆、汝がその父を辱しめたるを聞くや、汝と共にある者の手強くならん。」と。13) 三三茲に於いて人々屋上に14) アブサロムの爲天幕を張りしかば、彼すべてのイスラエルの前にて、その父の妾等の許に入れり。15) 三三さてその日アキトフェルが授けし策は、恰も天主に問いしものの如くなりき。アキトフェルの策は、彼がダヴィドの許にありし時も、アブサロムの許にありし時も、すべてかくの如くなりき。

12) 彼はアキトフェルのほかにクサイをも顧問にしていた。―13) アキトフェルがすすめたのは、ダヴィドの權をすべて繼承したことを表わすべき象徴的行動であつたのか、もしくは彼の父の妾を實際に犯すことであつたのか、それは不明である。いずれにしても子の父に對する破廉恥行爲で、二人の仲を全く裂くことであつた。この勸告は、父子の和睦を可能と思い、そのため公然アブサロム方に付くことを怖れている人々を拔け目なく勘定に入れている。

14) 本一一・二参照。ダヴィドが罪を犯したその同じ屋上。―15) これで一二・一一の預言が成就した。

第十七章

アキトフエルの策クサイに破らるークサイ、ダヴイドの許に通報すー

アキトフエル縊死す。

一　一アキトフエルまたアブサロムに云いけるは、「我、わが爲に一
二　万二千の人を選び出し、起ちて今夜ダヴイドを追いかけ、
三　彼疲れて手萎えし所を襲い、之を擊たん。しかして彼と共なる民の悉く逃げ去らん時、我、一人遺されたる王を討ち取らん。
四・五　然る後我はすべての民を一人の人の歸る如くに率い戻らん、汝の求むるは唯一人のみなればなり。かくて民皆安らかならん。」と。
六　四彼の言はアブサロム、及びイスラエルの長老等一同の意に適いたり。[1] 五されどアブサロム云いけるは、「アラク人クサイを召べ、我等またその云う所をも聽かん。」と。六クサイ乃ちアブサロムの許に至るや、アブサロム之に云いけるは、
「アキトフエルはかく

第十七章　1) アキトフエルの献策はよかつたが早急の措置が必要であつた。ダヴイド方は小勢で疲れているので、今ならまだ奇襲するに容易である。しかしダヴイドに暇を與えて、ヨルダン東方地區にその軍勢を配置されればアブサロムにとつて危險困難が増大する。

七　の如く語れり。我等然すべきや否や。汝の授くる策は如何に。」と。七時にクサ
イ、アブサロムに云いけるは、「この度アキトフェルの授けたる策は宜しから
八　ず。」と。八クサイ累ねて云いけるは、「汝の父及び彼と共に在る人々がいと剛
九　くして、さながら仔を奪われたる熊の森にて猛り狂う如く、心に憤れるは、汝
の知り給う所なり。また汝の父は武人なれば民と共に留まりおらじ。[2]九恐らく
彼は今穴もしくはその心に適える處に隱れおらん。もし誰か一人最初に仆るる
時は、之を聞く者いずれも云わん、〃アブサロムに從える民の中に數多の人死
一〇　あり。〃と。一〇かくては心獅子の如き剛勇の士と雖も、恐怖に挫けん。そはイ
スラエルのすべての民、汝の父の雄々しき人なること、また彼と共にある人々
一一　のみな猛きことを知りおればなり。一一さて我に良策と見ゆるは是なり、ダンよ
りベルサベーに至るまで、すべてのイスラエルを濱の眞砂の數知れぬ如く汝の
一二　許に集め、汝、彼等の中央にあるべし。一二しかして彼、いずれの處にて見出さ
るるとも、我等之を襲いて、露の地に滴る如く彼に立ちかからん。かくて我等

2) 王はアキトフェルの云う如く疲れ果てはいない。

一三　彼と共にある人々を一人だに殘さじ。一三もしまた彼何れの邑にか入らば、イスラエル皆その市の周圍に綱をかけ、之を谷[3]に曳き入れん、さらばその小石の一つだも見えざるに至るべし。」と。一四アブサロム及びイスラエルの人々皆云いけるは、「アラク人クサイの策こそ、アキトフェルの策に優りたれ。」と。かくてアキトフェルの有利なる策は、主の御旨によりて破れたり、是、主がアブサロムに災禍を下し給わん爲なり。一五次いでクサイ、司祭サドク及びアビアタルに云いけるは、「アキトフェルはアブサロムとイスラエルの長老等に此々の策を献じ、我は然々の策を献じたり。一六されば汝等速かに人を遣し、ダヴィドに告げて云わしめよ、〃今夜は荒野の平地に留まらずして、猶豫せず渡り行け、然らずば王及び之と共にある人々皆、呑まるるに至らん。〃」と。一七さてヨナタス及びアキマースはロゲルの泉[4]の邊に佇みおりしに、婢[5]行きて彼等に告げしかば、彼等その消息をダヴィド王に傳えんとて出發てり。蓋し彼等は人に見られざらん

3) 都市のある所の下の渓谷
4) この泉はセドロンの谷とベン・ヒエロムの谷との合する点にあり従つてエルサレムの南方にある。
5) 司祭たちがダヴィド方に付いていることを知つていたので、一人の婢を仲介者として用いた

一八　ため市に入ることと能わざりしなり。一八然るに一人の下僕[6]彼等を見てアブサロムに告げぬ。されど彼等は急ぎ行きて、バフリムなる或人の家に入りしが、その庭に井戸ありしかば、彼等その中に下れり。一九女乃ち蓋を取り、搗きたる大麥を乾す如く井戸の口の上に擴げたり。されば二〇やがてその事現れざりき。

アブサロムの僕等、その家に來りてかの女に云いけるは、「アキマース及びヨナタスは何處にありや。」女、彼等に答えけるは、「彼等は少量水を味いたる後急ぎ過ぎ行きぬ。」されど彼等を探ぬる人々、之を見出さざりしかば、イエルサレムに歸れり。二一かくてその人々去るに及び、彼等井戸より上り、行きてダヴィド王に告げて云いけるは、「起ちて速かに河を渡れ。そはアキトフェル汝等に對して、かくの如き策を授けたればなり。」と。二二ダヴィド及び彼と共にある民みな、起ちて明るくなるまでヨルダンを渡りしが、誰一人河を渡らずして殘りたる者あらざりき。二三然るにアキトフェルは、己が策の用いられざるを見て、その驢馬に鞍置き、起ちて己が家にとその市に行き、家事を整理して縊

6) アブサロムの間諜の一人

二四　れ死し、その父の墓に葬られぬ。7)　二四さてダヴィド陣營に至りしに、アブサロムはヨルダンを渡れり、
二五　即ち彼及び彼と共なるイスラエルの人々皆然せり。二五時にアブサロム、ヨアブの代りにアマサを立てて軍の將となしたり。アマサは、ヨアブの母たるサルヴィアの姉妹ナースの娘アビガイルの許に入りしイエズラエル出身の名をイエトラと稱ぶ人の子なりき。二六かくてイスラエルは、アブサロムと共に、ガラード
二七　ドの地に陣せり。二七ダヴィド、陣營8)に至りし時、
二八　アンモンの裔等に屬するラバトのナースの子ソビ、9)ロダバルのアミエルの子マキル、10)及びロゲリムのガラード人ベルゼライ、11)二八彼に持ち來るに、臥床と帷と、土器と、小麥と大麥と、粉と、炒麥と、豆

7) アキトフエルは、アブサロムがクサイの献策を入れて後、すぐ出征するだろうと固く思いこんでいた。アキトフエルは、そうすれば自分がダヴィドに少しも目をかけられぬであろうと思つたので、死刑になるよりはと、自殺を選んだのである。—8) マハナイム市。この名はヘブレオ語で陣營を意味するこれはイスボセトがその居住の地に選んだ都市であつた。—9) ソビはアンモン人の王ハノンの兄弟であるらしい（一〇・一参照）。—10) マキルがヨナタスの子に歡待を惜しまなかつたことは既に我らの知る所。九・四参照。マキルはもとサウルに付いていたが、それにも拘らずダヴィドにいつまでも忠義を盡した。—11) 後に一九・三一—三九に出てくる。興味ある挿話の主人公。

二九

と扁豆と、揚豌豆と、蜜と、牛酪と、羊と肥えたる犢とを以てし、ダヴィド及び彼と共にある民に食せしめんとて與えたり。蓋し彼等は民が荒野にて飢え渇きて疲れたりと推察したるなり。

第十八章

アブサロム、戰に敗れてヨアブに殺さるーダヴィド彼を悼む。

一　茲に於いてダヴィド、民を閲し、その上に千夫長及び百夫長を立てゝ、二　民の三分の一をヨアブの手に、三分の一をアビサイの手に、三分の一をゲト出身なる兄弟サルヴィアの子アビサイの手に、三分の一をエタイの手に托したり。しかして王民に云いけるは、「我も亦汝等と共に出征かん。」三　然るに民答えけるは、「汝は出で給うべからず。蓋し我等逃げ去るとも、我等のことはさして彼等に關わりなからん、また我等の半ば殪るとも、彼等はあまり意に介せざるべし、其は汝一人が一万人に相當すればなり。2)　され

第十八章　1)千夫及び百夫はイスラエル軍隊の普通の分け方であつた。民三一・一四。母上二二・七等参照。

四　ば汝、邑の中にありて我等を援け給うこそ良けれ。」3)　四王彼等に云いけるは、「我は汝等に宜しと見ゆる所を爲さん。」と。

五　かくて王門の邊に立ち、4)　民はそれぞれ百人、また千人の隊となりて出で征けり。　五時に王、ヨアブとアビサイとエタイとに命じて云いけるは、「わが爲に子のアブサロムを生かしおけ。」と。民皆王がすべての將官にアブサロムの爲命ずるを聞けり。

六　六かく民イスラエルに對し野に出でたるが、戰鬪はエフライムの森にて行われたり。5)　七イスラエルの民其處に於いて、ダヴイドの軍に破られ、その日二万人の大殺戮行われぬ。　八次いで其處の戰鬪は全地の表に擴りしが、その日民の中森に滅ぼされし者は劍に仆れし者よりも、遙かに多かりき。6)　九偶々アブサロムは騾馬に乘りて、ダヴィドの僕等に遭遇せり。　時に騾馬、繁れる櫟の大木の下に入りたるに、彼の頭その櫟にかか

2) 彼を殺すことは何よりも敵の目ざした所でありそれだけに彼の存命は此上なく重要なことであつた。一萬とは大なる数である。—3) 母上一八・七。4) 己を衛る者共をその分列行進する間激勵するために。—5) マハナイム市と反對の方にある。マハナイム市とヨルダン河との間は狹いので、ヨルダンの彼方のエフライムの森林山岳地帶を選んだ。—士一二章。—6) 即ち叛軍の兵は戰場でよりも、逃走して淺瀬を渡る時に遙かに多く殺された。

一〇 りて、7) 彼は天地の間に吊るされ、その乘り居し騾馬は過ぎ行きぬ。一〇然
るに或人之を見、ヨアブに告げて云いけるは、「我はアブサロムが櫛樹に
一一 懸れるを見たり。」と。一一ヨアブ己に告げたる人に云いけるは、「汝彼を見
しならば、何故之を地に刺し通さざりしぞ。さらば我汝に、銀十シクルと
一二 帶一本とを與えしならんに。」一二彼ヨアブに云いけるは、「汝たとい我が
手に銀千枚を測り與え給うとも、我斷じて王の子にわが手を下さじ。其は
我等、王が汝とアビサイとエタイとに命じて、〝わが爲に子のアブサロム
一三 を生かしおけ。〟と曰いしを、自ら聞きたればなり。一三なおまた我己が生
一四 命を賭して、敢て然行いなば、是は斷じて王に隱るるを得ざるべく、また
汝も立ちて我を非難し給うべし。」一四ヨアブ云いけるは、「汝の意の如くな
一五 らで、我汝の前に彼を襲わん。」と。彼乃ちその手に三本の槍を執り、之
をアブサロムの胸に突刺したり。しかして彼なお櫛樹にかかりて跪ける間
に、一五ヨアブの武器持なる十人の若者等馳せ寄りて、之を擊ち殺せり。

7) アサエルにはその早まつたのが、アキトフエルにはそのさかしさが、またアブサロムにはその頭髪が、それぞれ破滅のもととなつた。

8) 武功の報賞兼勳章としての軍用帶。

一六　一六茲に於いてヨアブ、群衆をいたわらんとして喇叭を吹き鳴らし民を止めて、逃ぐるイスラエルの後を追わざらしめたり。一七次いで人々アブサロムを取り、之を森の中の大なる穴に投げ入れ、石を運び集めて彼の上に甚だ大なる堆積を築きぬ。9) されどイスラエルは皆、その天幕に逃げ入りたり。一八さてアブサロムは、そのなお生ける間に、己が爲

一七　一八　一九　二〇

一つの柱を建てしが、之は王の谷にあり。10) 即ち彼云いけるは、「我に子なし。されば之をわが名の記念とせん。」と。彼この柱に己が名を附したるが、今日に至るまでそは「アブサロムの手11)」と稱せらる。一九さてサドクの子アキマース云いけるは、「我馳せ行きて、王に、主が之をその敵の手より救い、正義を行い給いしことを告げん。」と。二〇ヨアブ彼に云いけるは、「汝、今日使者たるべからず、12) 他

9) 書七・二六にあるアカムの墓や書八・二八―二九にあるイエリコの王の墓の如く。若干の解釋者の説によればこの場合は、叛いた王子の屍に投石の刑の眞似事をしたのであるという。

10) セドロンの谷にあるいわゆる「アブサロムの墓」は後代の作であるが、それ以前のアブサロムの記念柱もその場所にあつたと思われる。―11) 遺跡。

12) 使者が勝利の吉報のほかにアブサロム戰死の凶報をも傳えねばならぬ所から、その生命を危ぶんだヨアブは、司祭の子でなく奴隷であるクシをしてその知らせを傳えさせようとした。

日消息を傳うべし。王の子死したるにより、我、今日は汝が消息を傳うるを欲せず。」と。二一次いでヨアブ、クシに云いけるは、「行きて、汝の見たる所を王に告げよ。」と。二二クシ、ヨアブに敬禮して馳せ去りぬ。二三然るにサドクの子アキマース、累ねてヨアブに云いけるは、「我も亦クシの後より馳せ行くに何の妨げあらんや。」ヨアブ彼に云いけるは、「わが子よ、汝なんぞ馳せ行かんとするや。汝吉報を傳うる者とならざるべし。」二三彼答えけるは、「されど我馳せ行くとも何かあらん。」ヨアブ彼に云いけるは、「さらば馳せ行け。」茲に於いて二四アキマース、近道より馳せ行きて、クシを追い越したり。二四時にダヴィド二つの門の間に13)坐したりけるが、門の頂上の石垣の上に在る見張の者、目を翹げて唯獨り馳せ來る人を見、二五叫びて王に告げしに、王云いけるは、「もし獨りならば、14)その口に吉報あり。」と。二六やがてその人急ぎ近づくや、二六見張の者、また一人の馳せ來るを見、屋上より叫びて云いけるは、「他にまた唯獨りにて馳せ來る者見ゆ。」と。王云いけるは、「それも亦吉き使者なり。」二七然るに見

13) 門の塔の外と内との扉の間に。
14) 唯一人ならば落人ではない。

張の者云いけるは、「先の者の走るを見るに、サドクの子アキマースの走るが如し。」と。
二八 王云いけるは、「彼は善き人ぞ。吉報を携えて來るなり。」と。二八時にアキマース、叫びて王に「王よ、幸あれ。」と云い、その前に地に平伏して王に敬禮し、且云いけるは、
「主汝の天主は祝すべきかな、わが主君王に對いて手を擧げたる人々を閉口せしめ給えり。」と。二九王云いけるは、「子のアブサロムは無事なりや。」アキマース云いけるは、
二九 「王よ、汝の僕ヨアブ汝の僕我を遣したる時、我は大なる騷擾を見しが、その他に何事も知らざるなり。」三〇王彼に云いけるは、「進みて此處に立て。」と。彼乃ち進みて傍に
三〇 立ちしに、三一クシ現れ來りて云いけるは、「わが主君王よ、我は吉報を齎せり。そは主は今日汝の爲に正義を行い、凡て汝に對いて手を擧げたる者の手より汝を救い給いたれ
三一 ばなり。」三二王クシに云いけるは、「子のアブサロムは無事なりや。」クシ之に答えて云いけるは、「わが主君王の敵、及び凡て彼に對いて起ち、害を加えんとする者は、かの
三二 御子の如くなれかし。」と。三三茲に於いて王悲しみ、門の高閣に上りて泣けり。しかして彼行きながらかく云いぬ、「わが子アブサロムよ、わが子アブサロムよ、誰か我をし
三三

て汝に代りて死するを得しむる者ぞ。わが子アブサロムよ、わが子アブサロムよ。」と。15)

15) 本一・二など参照。

第十九章

ダヴィド、ヨアブの諫言に悲嘆を止む―ダヴィド召還されてセメイ及びミフィボセトに迎えらる―ベルゼライ迎えらる―ユダの人々とイスラエルの人々との争。

一 時に王その子の爲に泣き悲しめる由、ヨアブに傳えられたれば、二その日の勝利はすべての民にとりて嘆きとなりぬ。蓋は民その日「王その子の爲に嘆く」と云うを聞きたればなり。三されば民のなす如く、市に入ることを避けたり。1) 四王はその頭を覆い、聲高く叫びて云いぬ、「わが子アブサロムよ、わが子アブサロムよ、わが子アブサロムよ、わが子よ。」と。五折しもヨアブ家に入り、王の許に至りて云いけるは、「汝は今日、汝の生命と、汝の息子等及び汝の娘等の生命と、汝の妻等の生命と、汝の妾等の生命とを救いたるすべての僕の面を辱しめたり。六汝は汝を憎む者を愛し、汝

1) 凱旋入城式を行わないで

を愛する者を憎みて、今日その諸將をも、その僕等をも意に留めざるを示せり。我寔に悟る、もしアブサロム生存えて、我等皆殺されしならば、汝の意に適いたらんことを。七されば今起ち出で、語りて汝の僕等を滿足せしめ給えかし。實に我主によりて汝に誓う、汝もし出で給わざらんには、今夜汝の許に留まる者、一人だにあらざるべし。しかして是は、汝の若き時より今に至るまで汝に臨みしすべての不幸よりも汝に惡しかりなん。」と。八王乃ち起ちて門に坐せり。やがて王の門に坐せること、すべての民に傳えられしかば、衆人皆王の前に來りぬ。されどイスラエルは逃げてその天幕に入れり。[2] 九イスラエル諸族の民また皆爭いて云いけるは、「王は我等の敵の手より我等を救い出し、フィリスト人の手より我等を救いしに、今はアブサロムの爲に國を逃げ出でたり。一〇しかも我等が注油して我等の上に戴きしアブサロムは、戰爭に死したり。何時まで汝等默して、王を連れ歸らざる。」と。一一然るにダヴィド王、司祭サドク及びアビアタルの許に人を遣して、云わしめけるは、「ユダの長老等に告げ

2) イスラエルとはアブサロムに付いていた者共本一八・二六、一七參照。

て云え、3)　〃汝等何故に王をその家に連れ戻す最後の者となるや。
（實にすべてのイスラエルの言は、王の許、その家に至れるに。）
一二　汝等はわが兄弟、わが骨わが肉なり。さるを汝等何故に王を連れ歸
一三　る最後の者となるや。〃と。一三またアマサに云え、4)〃汝はわが骨、わ
一四　が肉ならずや。汝もしヨアブに代りて毎もわが前に軍の總帥たらずば
天主我にかくなし、更に累ねてかくなし給え。〃と。」一四彼かくユダ
のすべての人の心を得て一人の如くにならしめたれば、彼等王の許に
人を遣して、「汝その總べての僕と共に歸り給え。」と云わしめたり。
一五　一五茲に於いて王歸りて、ヨルダンまで至りしに、ユダ皆ガルガラまで
一六　來りて王を迎え、之を奉じてヨルダンを渡らんとせり。一六時にバフリ
一七　ムのイエミニの子なるゲラの子セメイ、急ぎユダの人々と共に下りて
ダヴィド王を迎えしが、5)一七またベンヤミンの者一千人をも伴いたり。
なおサウルの家の僕シバ、及びその息子十五人とその僕二十人とも彼

3) ダヴィドはアマサをただ赦すばかりでなく、司令官の地位に擧げると云つて、特にユダを勵ました。これは自族及び全国の中心たるイエルサレムを再びわが手に付け、他の諸族に、その下位にあることを一層強く要求するためであつた。―4) アマサとダヴィドとの關係については、本一七・二五を見よ。
5) 王上二・八。

一八　と共にあり、彼等王の前にてヨルダンに馳せ入り、一八淺瀬を渡りて
王の家族を渡し且その命の如くになさんとせり。さてゲラの子セメ
一九　イは、既にしてヨルダンを渡り終わるや、王の前に平伏し、一九之に
云いけるは、「わが主君よ、罪を我に歸し給うなかれ。またわが主
二〇　君王よ、イェルサレムより出で給いし日に於ける、汝の僕の惡行を
憶え給うなかれ、汝王よ、之を汝の心にとめ給うなかれ。二〇實に汝
の下僕我はわが罪を知る。されば之こそ我は今日、ヨゼフの全家に魁
二一　けて、6)わが主君王を迎えに下りたるなれ。」と。二一然るにサルヴィ
アの子アビサイ、答えて云いけるは、「セメイはその言の故に、殺
さるべきにあらずや、そは、彼、主の注油し給いし者を呪いたれば
二二　なり。」と。7)二二ダヴィド云いけるは、「サルヴィアの子等よ、そは
我と汝とに何かある。汝等何故今日我に誘惑者となるや。今日8)イ
スラエルに殺さるべき人なきにあらずや。我、今日わがイスラエル

6)ここの「ヨゼフの全家」はユダ族に對して、北方の諸族をさす。ヨゼフから出たエフライム人はその中で政治上に最も勢力があつた。

7)セメイの呪詛は本一六・六―一三。アビサイは王があまりにも柔和であることによつて、ほかにも容易に叛く者が出はしないかと心配しているので、セメイの辯明を聞かぬよう勸める。―8)母上一一・一三參照。

二三 の王とせられたるを、知らざらんや。」と。　二三かくて王はセメイに「汝死せざ
二四 るべし。9)」と云いて、彼に誓いぬ。　二四サウルの子ミフィボセトも亦、王を迎え
に下りしが、彼は王の出でし日よりその恙なく歸りし日まで、その足を濯がず
二五 その鬚を剃らず、その衣服を洗わざりき。　二五彼、イェルサレムにて王を迎えし
時、王之に云いけるは、「ミフィボセトよ、汝何故に我と共に來らざりしか。」
二六 彼答えて云いけるは、「わが主君王よ、わが僕我を輕蔑せり。即ち汝の下僕、
我はわが爲驢馬に鞍置けと彼に云い、打乘りて王と共に行かんとしたり、そは
汝の下僕我は跛者なればなり。　二七然るに彼然せざるのみならず、汝の下僕我
をわが主君王に誣い訴えたり。されどわが主君王よ、汝は天主の使の如し。汝
の意に適う如く爲し給え。10)　二八實にわが父の家はわが主君王に死を以て罰せら
るべきに、汝は汝の下僕我を汝の食卓の客の中に置き給えり。されば我に何の
正しき訴えかあらん、また我この上王に何をか叫び訴うるを得んや。」と。
二九 王乃ち彼に云いけるは、「汝、累ねて何を語るや。わが云いたる事は定まれ

9) 少くとも今日は殺さぬ。王上二・八、九参照
10) 本一六・三。一四・一七、二〇。母上二九・九。

三〇 り。汝とシバ、領地を分て。」と。11) 三〇ミフィボセト、王に答えける
三一 は、「わが主君王安らかにその家に帰り給いし上は、彼に全部を取
らしめ給え。」と。 三一ガラード人ベルゼライも亦、ロゲリムより下
三二 り、12) 王を奉じてヨルダンを渡り、河の彼岸にても之に隨い行かん
と構えたり。13) 三二さてガラード人ベルゼライは、甚だ年老い、即ち
三三 八十歳なりしが、王の陣營に留まりし時、王に食物を給したりき、
そは彼甚だ富める人なりしが故なり。三三さればベルゼライに云
三四 いけるは、「我と共に來れ、さらば汝イエルサレムにて、我と共に
安らかに息うを得ん。」と。三四ベルゼライ、王に云いけるは、「わが
三五 生くる年の日、幾許ありてか我は王と共にイエルサレムに上るべき。
三五我は今日八十歳なり。わが感覺豈甘きと苦きとを識別くる力あら
んや。14) また飲食爭で汝の僕を樂しますを得んや。また我豈この上
男の歌手女の歌手の聲を聽くを得んや。何の故にか汝の僕、わが主

11) ダヴィドはミフィボセトにその領地の半分しか返さなかつたから（本九・七）、彼を全く罪なき者とは認めていなかつたらしい。彼はまたシバの勢盛になつた家がまた叛逆の種を播きはせぬかとも心配した。―12) 本一七・二七参照。―13) 本一七・二八。王上二・七。―14) もうあなたは山海の珍味などでわたしを喜ばすことはできない。

三六 君王の累いとなるべき。三六汝の下僕我は王と共にヨルダンよりなお少しく行かん。我はこの報賞を要せず。三七ただ願わくは我を帰らしめ、わが市にて死し、わが父わが母の墓の畔に葬らるるを得しめ給え。されど茲に汝の僕カマアム[15]在り。わが主君王よ、彼をして汝と共に行かしめ、凡て汝に良しと見ゆる所を之に爲し給え。」と。三八王乃ち彼に云いけるは、「カマアムは我と共に渡り行け。さらば我、何にても汝の意に適う事を之に爲さん。また汝は凡て我に願う所を得べし。」と。三九すべての民も王もヨルダンを渡りし時、王はベルゼライに接吻し、之を祝しぬ。やがて彼は己が處に帰れり。四〇王次いでガルガラに進みしが、カマアム彼と共にありき。時にユダの民皆王を送りて渡れり、またイスラエルの民はたゞ半のみ其處に在りき。四一茲に於いてイスラエルの人々皆、王の許に馳せ集まりて之に云いけるは、「我等の兄弟なるユダの人々が、汝を盗み去り、王とその家族、並びにダヴィドと共なるそのすべての部下の人々を送りてヨルダンを渡りしは何故ぞや。[16]」と。

15) わが子王上二・七。

16) これが動機となつて、イスラエルの他の諸族が王を護衛歸還するのに召されぬという事態になつた。イスラエル人は眞先にダヴィド

四二 ユダの人々擧りてイスラエルの人々に答えけるは、「そは王我に近きを以てなり。汝何故この事に就きて怒るや。我等何か王の物を食したるか、もしくは我等に賜物與えられたるか。」と。17) イスラエルの人々ユダの人々に答えて云いけるは、「王にとりて、我、汝より十倍も大なり、されば汝のものたる以上にわがものなり。汝、何故我に不正を行い、先ず我に告げずして、わが王を連れ帰りしや。」と。 されどユダの人々はイスラエルの人々よりも素氣なく答えにき。18)

第二十章

セバ叛く—アマサ、ヨアブに殺さる—アベラ包圍されしが、市民石垣の上よりセバの首を投げ出すに及びて、ヨアブ軍を率いて去る。

1) ここに、またイエミニの人、ボクリの子にして、名を

とまた關係を結んだ者であつた。ところがユデア人が彼らをさしおいて首尾よく王を連れ戻したので冷遇されたように感じた。—17) ユデア人は自己辯明として、自分たちが王と血の繋りがある故に、これに對し特別の權あることを力説した。また自分たちの行動が無私の動機によるものであることをも強調した。—18) この論爭は益々惡化して、新たに内亂を起すに至つた。二〇・一以下參照。

第二十章 1) ガルガラに。

セバと云うベリアルの人ありしが、彼喇叭を吹き鳴らして云いけるは、
「我等はダヴィドに關係なし、またイサイの子の中に嗣産を有せず。イ
スラエルよ、汝の天幕に歸れ。」と。[2] 二よりてイスラエル皆ダヴィドを
離れ、ボクリの子セバに從いたり。されどユダの人々はその王に附きて
ヨルダンよりイェルサレムに至りぬ。三さて王はイェルサレムなるその
家に至るや、家を守る爲に殘し置きたる妾なる十人の女を取りて、之を
監禁し、彼等に食を給したり。しかして彼、彼等の許に入らず、彼等は
その死する日まで閉じこめられ、寡婦として暮せり。[3] 四或時王アマサに
云いけるは、「わが爲三日目までにユダの人々を悉く召び集めよ、しか
して汝も席に列なれ。」と。[4] 五アマサ乃ち行きてユダを召び集めしが、
王の彼に定めたる期日以上に留まれり。六時にダヴィド、アビサイに云
いけるは、「今やボクリの子セバ、アブサロムよりも激しく我等を攻め
んとす。されば汝の主君の僕等を率いて、彼の後を追え、是、彼が石垣

2) 即ち公然ダヴィドに離反せよ　ロボアムの下における叛逆と同じ叫び。王上一二・一六參照。
3) 彼らは公然犯された。しかし彼らに責はなかつたから、ダヴィドは離縁狀を與えなかつた。
4) ダヴィドは一九・一三の已が約束を果たそうとする。

七 ある市を得て我等を遁るることなからんためなり。」と。七茲に於いてヨアブの部下なる人々、彼と共に出で征きぬ、ケレト人とフェレテト人とも亦然せり。

八 かくすべての勇士、ボクリの子セバの後を追わんとてイエルサレムより出で征けり。八彼等ガバオンに在る大石の邊に至りし時、アマサ之を迎えに來たり。

九 折しもヨアブはその衣服と長等しき窄き上衣を着、その上に腰まで懸れる鞘入の劍を帶びたりしが、是は僅かの動きにも拔け出でて、斬るを得る如く作られたりき。九ヨアブ乃ちアマサに、「わが兄弟よ、幸あれ。」と云いて、その右手もてアマサの顎を捉え、之に接吻する如くに爲しぬ。[5] 一〇然るにアマサは、ヨアブの有てる劍に注意せざりしに、ヨアブその脇腹を擊ち、その腸を地に流し出したれば、再び傷を負わすに及ばずして彼死せり。それよりヨアブ及びその兄弟アビサイはボクリの子セバの後を追いぬ。一一さるほどに、ヨアブ方の或人々、アマサの屍の傍に立ちて云いけるは、「視よ、ヨアブに代りてダヴィドの將たらんと欲せし者を。」と。一二さてアマサは血に染みて街道の中央に倒れ

5) アラビヤ人やペルシヤ人が歡迎の接吻をする時の習慣。—王上二・五。

居たるに、或人、民皆彼を見んと立ち留るを見て、アマサを街道より畑に移し、通行人をして、その爲に止まることなからしめんために、之を衣服もて覆いたり。一三かくて彼街道より移さるや、人皆ヨアブに從いて進み、ボクリの子セバの後を追いぬ。一四然るにセバはイスラエルの諸族の中を通り行きてアベラ及びベトマーカまで至りしに、精鋭悉く彼の許に集まりたり。一五やがて彼等來りて之をアベラ及びベトマーカ(6)に圍み、市の周圍に堡壘を築きぬ。かくて邑を圍み、ヨアブと共にある民、皆石垣を毀たんと力を盡せり。

一六時に賢き一人の女、市より呼ばわりけるは、「聽けよ、聽けよ、ヨアブに云え、〃此處に近よれ、さらば我汝と語らん。〃と。」一七彼之に近よるや、女云いけるは、「汝はヨアブなりや。」彼「然り。」と答えけるに、女彼にかく云いぬ、「汝の婢の言を聽き給え。」彼云いけるは、「我聽かん。」と。一八女再云いけるは、「昔の諺に云えるあり、〃尋問ぬる人は、アベラにて尋問ねよ。〃と。人々かく爲して目的を達せり。(7)一九我はイスラエルにて、眞實

6) この町はパレスチナの北端に當りヨルダン河の源に近く、ヘルモン山の南斜面にある。

7) アベラ出の女はこの諺でヨアブの注意を喚起しようとする。

二〇 を答うる女ならずや。然るに汝は市を荒らし、イスラエルの母たるものを倒さんことを圖る。何故汝は主の嗣産を滅さんとするや。[9]」二〇ヨアブ答
二一 えて云いけるは、「斷じて然らず、我斷じてかかる事をせず。我は滅ぼさず、また毀たず。二一事は然にあらず、ただエフライムの山地の人にしてボ
クリの子なる、名をセバと云う者、ダヴィド王に對いて手を擧げたり。彼
獨りを付せ、さらば我等市より退かん。」女ヨアブに云いけるは、「視よ、
二二 彼の首は、石垣より汝の許に投げ出すべし。」二二茲に於いてかの女、すべ
ての民の許に行き、之に賢しく語りしかば、彼等、ボクリの子セバの首を
斬りて、之をヨアブの許に投げ出せり。彼乃ち喇叭を吹鳴らしたれば、人
二三 々邑より退きて、各自その幕屋に入れり。しかしてヨアブはイェルサレム
に歸りて、王の許に至りぬ。二三かくヨアブはイスラエルの全軍の將帥たり
二四 ヨヤダの子、バナヤはケレト人及びフェレト人の將帥たり。[10] 二四またアド
二五 ウラムは稅貢を掌り、アリウドの子ヨザファトは史官、二五シバは書記官サ

8) この町は、他の町々が「子都市」としてこれに從屬依存している限り、「母都市」である。
9) まず和睦を申し出でずして。
10) 本八・一六—一八。

二六

ドク及びアビアタルは司祭、二六なおヤイル人イラはダヴイドの司祭[11]なりき。

第二十一章

サウルのガバオン人に對する罪に由る三年の饑饉—ガバオン人の望により
サウルの子孫七人磔けにせらる—數度フイリスト人と戰う。

一　一茲にダヴイドの代に三年の間引續きて饑饉あり、[1]ダヴイド主の託宣を仰ぎけるに、主曰いけるは、「そは血の咎あるサウルとその家との故にこそ。其は彼ガバオン人を殺したればなり。[2]」と。

二　二茲に於いて、王ガバオン人等を召して之に云いぬ。（因にガバオン人はイスラエルの裔等の中にあらずして、アモル人[3]の餘類なり。イスラエルの裔等は、正しく彼等に誓いたりしが、サウルは熱心よりイスラエル及びユダの裔等の爲にするが如く

11) レヴイの子孫の如く、普通の意味での司祭でなく、高官のこと。

第二十一章　1) この冒頭で、以下の記述が上述の出來事を、嚴密な年代順にならべたものでないことがわかる。—2) 我らはこの殺戮の詳細を知らない。—3) 彼らは本當はアモル人でなくヘヴ人であるがアモル人という名稱は屢々カナアンに住むすべての者に代用される

三　彼等を討滅ぼさんと圖りしなり。）[4]　三ダヴィド乃ちガバオン人に云いけるは、「我、汝等の爲に何をか爲すべき。また汝等をして主の嗣産を祝せしめん爲には、[5]汝等に何の償いをか爲すべき。」

四　ガバオン人彼に云いけるは、「我等は銀、金に對しては求むる所なし、ただサウルとその家とに對して之あるのみ。また我等はイスラエルの人を殺すことをば望まず。[6]」王彼等に云いけるは、「さらば汝等、わが汝等の

五　爲に何を爲すを欲むや。」五彼等王に云いけるは、「我等を苦しめ、不當に虐げたる人は、我等之を滅ぼして、イスラエルの領域の中にその

六　血統の一人だに殘らざるまでにせざるべからず。六彼の裔等の中、七人を我等に付せ、これ我等、曾て主に選まれし者たるサウルのガバーに於いて、主の御前に彼等を十字架に磔けんためなり。」王云いける

七　は、「我、與えん。」[7]七されど王は、サウルの子なるヨナタスの子ミフィボセトを惜しめり、其はダヴィドとサウルの子ヨナタスとの間に

4) 書九・一五。
5) 饑饉を天主に止めて頂くための祈願。—6) イエルサレムで人を殺す權利は我々にない。
7) 我々には殘忍と思われる要請を王は許容する。しかし復讐法（民三五・三三）に據れば ガバオン人にはサウルの流血の罪に對する償いを要求する權利がある。

八　主による誓ありたればなり。8) 然れども王は、アヤの娘レスファがサウルに産める二人の子、アルモニ及びミフィボセト、並にサウルの娘ミコル9) がモラティの出なるベルゼライの子ハドリエルに産める五人の子を取りて、之をガバオン人の手に與えしかば、彼等山

九　の上にて主の御前に之を十字架に磔けたり。10) しかして是等七人は共に、刈入の最初の頃、即ち大麥を刈り

一〇　初むる頃に死せり。一〇 然るにアヤの娘レスファは苦行の衣を取りて、刈入の始より、かの人々の上に天より水の滴り來るまで、之を己が爲岩の上に敷きおき、晝

一一　は鳥に、夜は獸に彼等を損わしめざりき。11) 一一 さるほどにアヤの娘にして、サウルの妾なるレスファの爲したる事、ダヴィドに傳えられたり。一三 ダヴィド乃ち行

8) 母上二〇・一二。一八・三。
9) 母上一八・一九によれば、ミコルの代りにメロブとすべきである。この女をサウルはダヴィドに與える約束をしたが、後他の男に嫁がせた。
10) 柱（十字架）にかけることは處刑後始めて行つたもので、その刑が執行されて、その地に血を流した罪の償い（民三五・三三）が果されたことを公けに示すため曝しものにしたのであつた。
11) 死刑に行われた者の死骸は本來即日埋葬される筈であつた（申二一・二三）。しかし雨不足で饑饉になつたため、この場合には天主が雨を降らせ給うまで、木の上にかけたままにしておいたのである。

一三　きてサウルの骨と、その子ヨナタスの骨とを、ヤベス・ガラードの人々より取りぬ、彼等はフィリスト人がゲルボエに於いてサウルを殺したる時、掛けし場所なるベトサンの街衢より之を盗みたりしなり。12)

一四　一三しかしてダヴィド、彼處よりサウルの骨と、その子ヨナタスの骨とを持ち來れり。また人々、磔けられたる者共の骨を集めたり。一四かくて之をサウルの骨、及びその子ヨナタスの骨と共に、ベンヤミンの地なるその父キスの墓の中に、その傍に葬り、13)王の命じたる所を悉く爲しぬ。この後天主再びその地に對して御心を宥め給えり。

一五　一五然るに14)フィリスト人、またもイスラエルと戰いをなしたれば、ダヴィド及び之に從うその僕等、フィリスト人と鬪いしが、ダヴィドの疲れたる時、一六アラファ族の者にて、その槍の鐵三百オンスの重量ある、イェスビベノブ、新しき劍を佩びて、ダヴィドを討たんとせり。

一七　一七時にサルヴィアの子アビサイ、彼を援けてそのフィリスト人を擊ち殺しぬ。茲に於いて人々ダヴィドに誓いて云いけるは、「汝、イスラエルの燈火を消さざらん爲、最早我等と共に戰爭に出

12) 母上三一・一二。
13) 埋葬せず、野獸や猛禽の餌食にするのは、大なる恥辱とされていた。
14) ほかの話。

一八　ずべからず。」と。15) 一八茲にまたゴブに於いて、フィリスト人と二度目の戰爭ありしが、その時フサティのソボカイ、巨人の一族なるアラファ人のサフを殺せり。16) 一九更にまたゴブに於いて、フィリスト人と三度目の戰爭あり、その時ベトレヘムの刺繡師森の子17) アデオダト、ゲト人ゴリアトを殺しけるが、18) その槍、機の梁の如くなりき。19) 二〇又ゲトに於いて四度目の戰爭ありしに、其處に一人の丈高き人あり、手には各〈々指六本、足にも各〈々指六本、即ち總てにて二十四本ありしが、20) 之もアラファ族の者なりき。二一彼イスラエルを罵りければ、ダヴィドの兄弟サマーの子ヨナタス之を殺しぬ。二二是等四人はゲトに於いて、アラファより生れし者なるが、ダヴィドとその僕等の手にかかりて殪れたり。

15) 王の死は全イスラエルを深い闇に閉じこめる。
16) 代上二〇・四。
17) ラテン語ヴルガタ譯ではヤーレの子エルハナンというへブレオ名を譯して、こうしてある。―18) 代上二〇・五によれば、エルハナンは「ゴリアトの兄弟ラクミ」を討ち取つた。―19) 母上一七・七參照。―20) いろいろな時代に認められる事。プリニウス著イストワール・ナショネル（國民史）一一・四三參照。

第二十二章

ダヴイド諸敵より救われし感謝の歌（巖の歌）

一 さてダヴイド、主が彼をその諸々の敵の手とサウルの手とより救い
二 給える日に、この歌の言[1]を主に申せり。三 曰く、「主はわが巖、わが
三 力、わが救主なり。[2] 四 強きわが天主、我之を恃みとす。わが楯、わが
救いの角、我を高むる者、わが避難場。汝我を不義より救い給わん、
四 我は讃稱うべき主を呼び頼まん、されば わが敵より
救わるべし。[3] 五 實に死の恐怖我を圍み、ベリアルの[4]流、我を恐れし
六 めたり。陰府の絆我を繞り、[5] 死の罠我が前にあり。七 我わが患難に
際して主を呼び頼み、わが天主に向いて叫ばん、さらば彼その聖殿よ
八 りわが聲を聞き給い、わが叫喚その耳に到らん。八 地震い動き、山の
九 基搖れに搖れたり、其は彼是等に對し怒り給いしに由りてなり。[6] 九 そ
の鼻よりは煙、その口よりは猛火立上り、炭之によりて燃えたり。

第二十二章

1) 詩篇第十七と同じ。
2) 詩一七・二。
3) 詩一七・四。
4) すなわち不義の
5) 冥府の力が私を縛めた、即ち無力にした。
6) 天主が現れ給う時の恐ろしい荒天の様は天主の御祐助を具象化するもの。

一〇 彼天を傾けて降り給い、その足の下には暗黒ありき。一一 彼智天使に乗りて翔り、風の翼にて舞い、一二 己が周圍に闇を置きて隱處となし、天の雲より水を滴らせ給えり。一三 その御眼前にある光輝によりて、炭火燃えたり。一四 主天より雷霆を下し、いと高き者その聲を出し、一五 矢を放ちて彼等を打散らし、電光を放ちて彼等を燒き滅し給いぬ。一六 主の御叱咤とその御激怒の息吹とによりて、海に海嘯起り、地の基露れ出でたり。一七 彼いと高き處より御手を伸べて我を捉え、洪水の中より我を引出し、一八 わが最も力ある敵、及び我を憎む者共より我を救い給いぬ。そは彼等我より强かりしが故なり。一九 彼はわが患難の日にわが前に來り、主わが支えとなり、二〇 我を廣き處に引き出し、我を救い給えり、そは我、彼に嘉せられたればなり。二一 主はわが正しきに循いて我に報い、わが手の清きによりて我に返し給わん。[7] 二二 そは我主の道を守り、惡を行いてわが天主より離れしことなければなり。二三 實にその御定めはわが眼前にあり、その御掟は我之を捨てたることなきなり。二四 我彼と共に完全き者となり、わが罪惡よ

7) ダヴィドに天主の御加護が與えられる第一の理由は彼の罪なきこと。

二五 り自を護らん。8)
二六 さらば主その御眼の前に於いてわが正しきに循い、わが手の潔きによりて我に報い給わん。
二七 汝は聖なる者には聖となり、雄々しき者には
二八 は完全き者となり給わん。
二九 汝は選ばれたる者と共に選ばれたる者となり、邪曲なる者には邪曲たり給わん。
三〇 また貧しき民には救いを施し、汝の眼に傲れる者をば卑うし給わん。
三一 實に主よ、汝はわが燈火なり、主よ、汝はわが暗闇を照らし給わん。
三二 實に我は汝により武装して馳せ行き、わが天主により石垣を跳び越えん。9)
三三 天主はその道汚玷なし、主の言は火に試されたり、彼は凡て之に倚頼む者の楯たり給う。
三四 主を他にして、誰か天主なる。我等の天主の外、誰か強き。
三五 天主は我に力を帶とせしめ、わが道を完からしめ、
三六 わが脚を鹿の如くになし、我を高き處に立たしめ給えり。
三七 彼はわが手に戰うことを教え、わが腕を青銅の弓の如くになし給う。10)
三八 汝はわが救拯の楯を我に與え給えり、汝の柔和は我を大ならしめたり。
三九 汝はわが下の歩みを廣からしめ給わん、かくてわが踝は挫くることなからん。
四〇 我はわが敵の後を追いて、之

8) 更にほかの理由は天主の正義と御憐憫。
9) 町の包圍攻撃の象どり。
10) 詩一四三・一。

三九 を撃破らん、彼等を滅ぼし盡すまでは歸らじ。
四〇 碎して、起つ能わざらしめん。彼等はわが足下に仆れん。
四一 我に力を帶とせしめ、我に敵對う者共をわが下に屈せしめ給えり。
四二 わが敵をして、我に背を向けしめ給えり、我は我を憎む者共を擊ち滅ぼさん。
四三 彼等は叫ばん、されど救う者あらざるべし。彼等は主に然せん、されど主之に応え給わざるべし。
四四 我は地の塵土の如く[11]彼等を打ち散らし街路の泥の如く、彼等を蹂み躙らん。
四五 汝はわが民の諍より我を救い給わん、汝は我を守りて、異邦人等の頭[12]たらしめ給わん。わが知らざる民、我に仕えん。
四六 異國人の子等、我に逆わん、されどその耳に聞くや、我に從わん。
四七 異國人の子等は意氣沮喪して、その隱場に退かん。
四八 主は活き給う、わが天主は祝せられ給う、わが救いの強き天主は崇められ給わん。
四九 我に復讐するを得しめ給う天主、諸民をわが下に屈せしめ給う者、わが敵の中より我を導き出し、我に逆う者共の上に我を擧げ給う者、汝は惡

11) 風が塵を吹き散らすように。
12) ダヴィドは、フィリスト人、アマレク人、アンモン人、アラメア人等周圍にいる異教民族を、己の權下に服從せしめた。
13) この詩は天主讃美で終る

五〇 しき人より我を救い給わん。14) 五〇されば主よ、我、異邦人等の中
五一 に汝を讃えん、我、汝の御名を謳わん。15) 五一彼はその王に大いな
る救拯を備え、その注油し給いし者なるダヴィドとその裔とに、
永久に御憐憫を施し給うなり。」

第二十三章

ダヴィドの最後の言―その勇士の名簿。

一 さてダヴィドの最後の言は次の如し。イサイの子ダヴィド曰く
二 即ち立てられて、ヤコブの天主に油を注がれし者となりたる人、
三 イスラエルの卓れたる詩人曰く、1) 「主の靈我によりて、語り給
四 えり。2) その御言はわが舌によれり。三イスラエルの天主我に曰え
五 り、イスラエルの強き御者語り給えり、人を治むる者、天主を畏
れて正しく治むる者あらん、四雲なき朝、日の出に、曙の光の輝
く如く、また、雨に草の地より崩え出ずる如く。3) 五わが家は天主

14) 詩一七・四九。
15) 羅一五・八。

1) 徒二・三〇。 2) 我はただ天主の御聲の如き者のみ。 3) 天主を畏敬する義人ダヴィドに與えられる祝福は、雨季の後裸かの燒原から若草を生ぜしめるような、太陽の及ぼす自然の恵みに似

の御前に、彼が我と、萬固く且強き永久の契約を、結び給うほど大ならず。實に之ぞわが一切の救拯、わがすべての望みなる。

六　その何事も生ぜざるはなし。されど邪曲なる者は、手に取り得ざる茨の如く、皆引き拔かれん。

七　之に觸れんと欲する者は鐵と槍の柄ともて、その身を固むべし。之は火に燃やされ燒けて無に歸せん。」

八　ダヴィドの勇士の名は次の如し。床几に坐せる者、[4] 三人衆の中最も智慧ある者、彼はいと柔かき樹喰虫の如くなりき。彼は一擊に八百人を殺せり。[5]

九　之に次ぐはアホフ人にしてその叔父の子[6]なるエレアザルにして、人々フィリスト人に挑み、戰わんとて集まれる時、ダヴィドと共に在りし三勇士の一人なり。一〇　イスラエルの人々上りし時、彼立ちて、その手萎え疲れ、劍を持ちて剛ばるに至るまで、フィリスト人を擊ちぬ。主その日大いなる救拯を行い給い、逃げたる民、殺

ている。―4) ハカモニの子イエスバハムのこと。代上一一章に出ている所によれば、この勇士の名はそうである。5) ―彼は柔弱の如く見えたが、實は最も勇敢剛毅の士であつた。ラテン語譯はここでイエスバハムの如き勇士のヘブレオ名の譯語をエズニ人アディノという名前そのままの代りに記したのらしい。テキストの誤り。―6) これはヘブレオ名ドドを譯したもの二四節においても同樣。

一一 されし者より物を剝ぎ取らんとて歸り來れり。二之に次ぐはアラリのアゲの子センマなり。曾てフィリスト人相集まりて陣中におりしに、其處には扁豆の滿ちたる畑ありしが、民、フィリスト人の面前より逃げたる時、

一二 彼その畑の中に立ちて之を護り、フィリスト人を擊ち破りぬ。しかして

一三 主、大いなる救拯を行い給えり。7) 一三之より先、三十人の長たる三人下りて、刈入の頃、オドラムの洞穴にあるダヴィドの許に至りしが、時にフィリスト人は巨人の谷に陣を布けり。8) 一四折しもダヴィドは塞に在り、又フ

一五 イリスト人の守備隊9)はその時ベトレヘムに在りき。一五然るにダヴィド憬れて云いけるは、「誰かベトレヘムの門の邊にある井戸の水を我に飲ましめん者もがな。」と。一六茲に於いて三勇士フィリスト人の陣を突破し、ベトレヘムの門の邊なる井戸より水を汲みて、ダヴィドの許に持ち來れり。

一七 されどダヴィドは之を飲まんとせず、之を主の爲に灌ぎて、一七云いけるは「願わくは主が我を憫みて、我に之を爲さしめ給わざらんことを。我爭で

7) これらの戰鬪は、ダヴィド統治の最初の頃、いな、彼が將たりしサウルの時代のことでさえあつたろう。

8) 代上一一・一五。―9) フィリスト人がイスラエル領内數カ所に置いた駐屯軍の一隊。

一八　生命を賭して行きたるこの人々の血を飲むべけんや。」と。　この故に彼は飲むを欲せざりき。三勇士は是等の事を爲したるなり。[10]

一九　一八またヨアブの兄弟にして、サルヴィアの子なるアビサイも、三人衆の長なりき。彼はその槍を擧げて三百人に敵い、之を殺せり。かくて彼は三人衆の中に名を得、一九三人衆の中に

二〇　て最も尊ばれ、彼等の長たりき。されど最初の三人には及ばざりき。二〇またヨヤダの子バナヤは、大いなる手柄を立てし卓れたる勇士にして、カブセールの出なり。彼はモアブの獅子[11]二人を擊ち殺し、更に雪の頃下りて、穴の中にて

二一　獅子一頭を擊ち殺せり。　二一彼はまた見事なる壯漢のエジプト人をも殺しぬ。そは手に槍を持ちたりしに、彼は杖を持ちてその許に下り行き、エジプト人の

二二　手より槍を捩ぎ取り、その槍もて之を殺せり。二二ヨヤダの子、バナヤは是等の

二三　事を爲し、二三三十人の中にて最も尊ばれたる三人の中に名を得たり、されどか

二四　の三人には及ばざりき。ダヴィドは彼を己が樞密顧問となしたり。　二四三十人の衆の中にあるは、ヨアブの兄弟アサエル、その叔父の子なるベトレヘムのエレ

10) 本節で將兵がダヴィドにどれほど愛着していたかがわかる

11) 獅子の如き人。ヘブレオ語原文はアリエル（獅子の義）。

二六 ハナン、二五ハロディのセンマ、ハロディのエリカ、二六ファルティのヘレス、
二七 テクアのアッケス、の子ヒラ、12) 二七アナトト13)のアビエゼル、フサティのモボ
二八 ナイ、二八アホフ人セルモン、ネトファ人マハライ、二九之またネトファ人なる
三〇 バーナの子ヘレド、ベンヤミンの裔等のガバートのリバイの子イタイ、三〇フ
三一 アラトン人バナヤ、ガース谷のヘダイ、三一アルバト人アビアルボン、ベロミ
三二三 のアズマヴェト、三二サラボニのエリアバ、ヤッセンの子ヨナタン、三三オロリ
三四 のセンマ、アロル人サラルの子アヤム、三四マカティの子なるアースバイの子
三五 エリフェレト、ゲロン人アキトフェルの子エリアム、三五カルメルのヘスライ
三六三七 アルビのファライ、三六ゾバのナタンの子イガール、ガディのボンニ、三七アン
三八 モニのセレク、サルヴィアの子ヨアブの武器持ベロト人ナハライ、三八イエト
三九 ル人イラ、之またイエトル人なるガレブ、三九ヘト人ウリア、合せて三十七人。

12) 母下一四・二を見よ。
13) 司祭の町アナトトはイエルサレムから程遠からぬ所にある。

ダヴイド民を算う―天主疫病を遣し給う―ダヴイド祈禱と犠牲とを献げて之を止む。

第二十四章

一　主の御怒またイスラエルに對して燃え、彼[1]ダヴイドを動かして彼等に云わしめけるは、「行きてイスラエルとユダとを算えよ。」と。[2]

二　王乃ち己が軍の將ヨアブに云いけるは、「ダンよりベルサベーまで、イスラエル諸族の中を通り行き、民を算えてその數を我に知らしめよ。」

三　ヨアブ、王に云いけるは、「願わくは、主汝の天主、汝の民にまた今あるほどを增加え、更に之をわが主君王の御眼前に百倍ならしめ給え。されどわが主君王がかくの如き事を爲し給うは何の爲ぞ。」

四　されど王はヨアブ及び軍の長等の言に對して己が言を固執したれば、ヨアブ及び兵の長等、イスラエルの民を數えんとて、王の面前より退出せり。

五　かくて彼等ヨル

第二十四章　1)天主でなくて、惡魔。代上二一・一参照。―2)ダヴイドは戰鬪能力ある者の數を知ろうとする。即ち彼は禁じられている（申一七・一六）征服を行うつもりなのである。されば兵數調査そのものでなく、その目的に非があるのである（出三〇・一二参照。）

ダンを渡り、3) ガドの谷にある邑の右手に當るアロエルに至り、六 ヤゼルを經てガラードに進み、ホドシの低地に入り、ダンの森に至りぬ。次いでシドンの附近を繞り七 チロの石垣の邊を過ぎ、ヘヴ人及びカナアン人の全地を過ぎて、ユダの南に來りベルサベーに至り、八 かく遍く國を經歷りて、九箇月と二十日の後、イェルサレムに至りぬ。九 かくてヨアブ、書き載せたる民の數を王に告げけるが、イスラエルの中に劍を拔く勇士八十萬、ユダの中に戰士五十萬ありき。4) 一〇 然るに民を算えたる後、ダヴィドの心已を責めしかば、ダヴィド主に申しけるは、「我は之を爲して、大いに罪を犯したり。されど願わくは主よ、汝の僕の罪を除き給え、實に我は甚だ愚かなる事を爲したるかな。」と。5) 一二 かくてダヴィド朝に起

3) 作戰行動の進捗は地勢の記述と共に明瞭に傳えられている。すなわちそれは先ずヨルダンの彼方のパレスチナで南から北に（五―六節）、次いでヨルダンの此方のパレスチナで北から南に（七―八節）行われた。―4) 代上二一・五には違つた數が出ているので、この數は正しく傳えられているか疑わしい。數の記載ではテキストに容易に誤謬のまぎれこむことがある。それともヨアブがわざと數を少く報告したのか。―5) 昔のヘブレオ人は罪を道德上の愚行と思つていたが、これは當然。母上一三・一三等を參照。

一二　きたるに、主の御言、ダヴィドの預言者にして洞見者なるガド に下れり、曰く、一二行きてダヴィドに告げよ、〃主かくぞ曰う、〃我汝に三つの中より選ぶ權を與う。その中より汝の欲する一つを選べ、さらば我之を汝に爲さん。〃〃と。」6)

一三　一三ガド乃ちダヴィドの許に至るや、之に告げて云いけるは、「或は汝の許、汝の國に七年の饑饉至らん、7) 或は汝三箇月の間汝の敵より逃げ隱れて、彼等汝を追い求めん、或は必ず汝の國に三日の間疫病あらん。されば、我を遣し給える御者に、我如何なる答をなすべきか、汝今よく之を考え給え。」8)

一四　一四然るにダヴィド、ガドに云いけるは、「我大く窮すされど人の手よりも主の御手に陷るこそ我にとりて善けれ、（蓋しその御憐憫は大なればなり。）」9)

一五　一五茲に於いて主、朝より定めの時まで、10) イスラエルに疫病を遣り給いければ、

6) 償いはいかなる場合にも天主にしなければならぬが本節のダヴィドに對しての ように、天主がこれを人に委ね給うことも屢々ある。

7) ここでは七年となっているが、代上二一・一二では三年。―8) 代上二一・一二。

9) ダヴィドは天主にお任せする。―代上二一・一三。

但一三・二三。―10) 上述の（一三節）三日が終るまでではなく、天主の御計畫中のある定めの時まで。これは午後三時頃獻げる夕べの犧祭をさすのであろう。

一六　ダンよりベルサベーに至るまで、民の死する者七萬人なりき。一六主の使イエルサレムの上にその手を差し伸べて、之を滅ぼさんとしたる時、11)主患難を憐み給いて、民を擊つ天使に曰いけるは、「足れり、今は早汝の手を留めよ。」と。時に主の使はイエブス人アレウナの打禾場の邊に在りき。12)一七ダヴィド天使の民を擊つを見し時、主に申しけるは、「罪を犯したるは我なり。我は惡を爲せり。されど羊なるこの者等は、そも何をか爲したる。13)願わくは汝の手を、我とわが父の家とに向け給え。」と。一八その日ガド、14)ダヴィドの許に來りて云いけるは、「上りて、イエブス人アレウナの打禾場に、主の爲祭壇を築き給え。」と。一九よりてダヴィド、ガドの言、即ち主の彼に命じ給いし言に循いて上れり。二〇アレウナ望みて王とその僕等との己が方に來るを認むるや、二一出でて地に面を伏せ、王に敬禮して云いけるは、「わが主君王、何の故にかその下僕の許に來り給

11)天罰の遂行は天使に委任される。（出一二・二三―二七）
12)この打禾場は、當時の都の外、後に聖殿の建つたモリア山上にあつた（代下三・一）。―ユデア人の云い傳えによれば昔のアブラハムの雄々しき犧牲の行われた地。―13)罪なきことを强調する隱喩法
14)代上二一・一八によれば、天使がガドにこの命令を傳えた

二二　える。」ダヴィド之に云いけるは、「汝の打禾場を買い、主の為に祭壇を設え、以て民の間に流行する疫病を熄めん為なり。」　二三　アレウナ、ダヴィドに云いけるは、「わが主君王、その好むままに、取りて献げ給え。燔祭には牛あり、薪に用うるには車と牛の軛とあり。」

二三　と。王[15]たるアレウナ、之を悉く王に與えたり、しかしてアレウナ、王に「願わくは主汝の天主、汝の誓願を嘉納し給わんことを。」

二四　と云えり。王彼に答えて云いけるは、「否、斷じて汝の欲する如くにはせじ。我は價を出して汝より買わん、我は無代にては主わが天主に燔祭を献げじ。」と。　ダヴィド乃ち銀五十シクルにて、打禾

二五　場と牛とを買えり。[16]　二五　かくてダヴィドは其處に主の為祭壇を築き、燔祭及び和祭[17]を献げたり。茲に於いて主その地を憐み給い、疫病イスラエルより熄みぬ。

15) ヘブレオ語では、「王よ、アレウナはこれを悉く王に献ぐ。」―16) 代上二一・二五によれば、購入金額は六百シクルとなつている。多分歴代史略の著者はこの五十シクルを當時の貨幣價値に換算したのであろう。―17) この二種の犠祭については、利一―三章を見よ。